

玉川大学
大学教育再生加速プログラム（AP）フォーラム 2020/02/01



玉川大学のAP事業の現状と成果

玉川大学 教学部長 中村好雄

はじめに



- 学校法人玉川学園 1929(昭和4)年設立
- 玉川大学 1949(昭和24)年設置認可(新制大学令)
- 東京都町田市玉川学園6-1-1 (61万㎡)
- 文学部・農学部・工学部・経営学部・教育学部・
芸術学部・リベラルアーツ学部・観光学部
8学部(7,178名、2019年5月1日現在)
- 文学研究科・農学研究科・工学研究科・教育学研究科・
マネジメント研究科・脳科学研究科
6研究科(125名、2019年5月1日現在)
- K-16が同一キャンパス

Outline

1. 玉川大学におけるAPの概要
2. アクティブ・ラーニングの推進
3. 学修成果の可視化（可視化の方法とツール）
4. 課題

玉川大学におけるAPの概要

テーマⅠ・テーマⅡの複合型（2014年度採択）

- アクティブ・ラーニングの推進と体系化
 - アクティブ・ラーニング科目の体系化
 - アクティブ・ラーニング事例集の作成
 - アクティブ・ラーニングハンドブックの刊行
 - ルーブリックの活用推進
- 教員の教育力養成
 - 全員参加型のFDプログラム
 - アクティブ・ラーニング、ルーブリック等ワークショップの開催
 - ティーチング・ポートフォリオの活用と教員評価
- 学修プロセス・成果の可視化
 - 学生ポートフォリオの活用
 - 学生調査・卒業生調査の実施

実施事業

(全開講科目にアクティブ・ラーニングの導入を目指す)

- ① ワークショップ開催(アクティブ・ラーニング、ルーブリック)
- ② 学修行動調査の実施(在学生・卒業生)
- ③ 日本語プレースメントテストの実施(1年次の語彙・読解力検定、日本語運用能力テスト)、3年次のPROG
- ④ 教員アンケート調査の実施(アクティブ・ラーニング、ルーブリック)
- ⑤ 学修支援強化のための専従スタッフ体制の確立
- ⑥ メンターによるティーチング・ポートフォリオ作成
- ⑦ FDer養成講座の開催(各学部1名、資格取得)
- ⑧ 担任の面談による学修成果の確認と指導
- ⑨ APフォーラムの開催と報告書の発行
- ⑩ 学内・外部評価の実施
- ⑪ アクティブ・ラーニング・ハンドブックの刊行

▶ 5

Tamagawa University

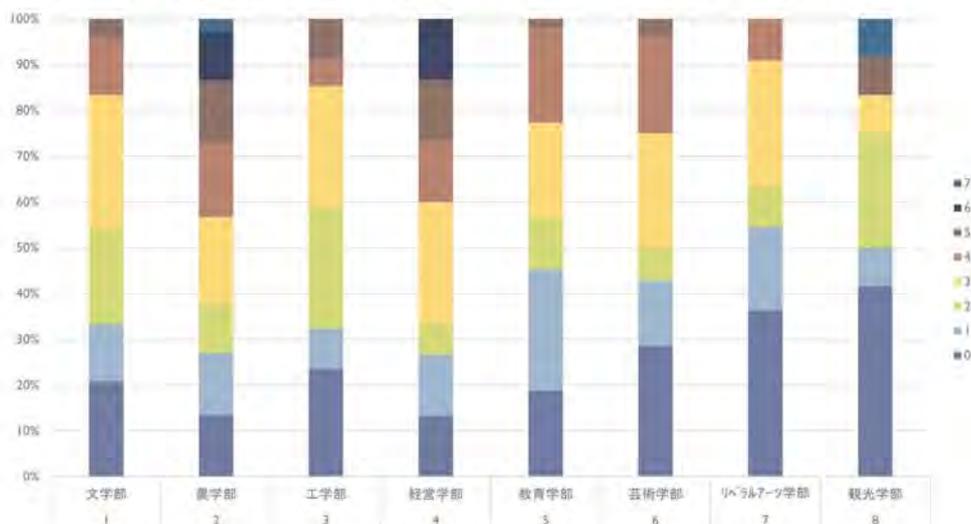
アクティブ・ラーニング・ワークショップの例 (AP終了までに専任教員全員が参加目標)

- 「反転授業の取り組み—島根大学全学共通・文系科目の実践を例に」
- 「授業英語化のための第一歩」
- 「学生の学修を促進させる教育評価」
- 「教育活動とIRをどうつなげるか—アクティブ・ラーニングの観点から」
- 「授業外学修を促す学修課題の組み立て方」
- 「多人数授業におけるアクティブ・ラーニングの活用」
- 「グループ学修を評価する—実技・実習を中心に」
- 「LMSを活用したアクティブ・ラーニング授業ワークショップ」
- 「学習環境・状況間のシームレスな接続を意図した授業デザイン」
など

▶ 6

Tamagawa University

アクティブ・ラーニング・ワークショップ 専任教員の参加数の割合（～2018年度）



▶ 7

Tamagawa University

アクティブ・ラーニングの導入・実施状況

■ [2014年度(起点)⇒2018年度(実績)]

- アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合
32.0%⇒64.3%
- アクティブ・ラーニングを行う専任教員数の割合
40.9%⇒72.5%

▶ 8

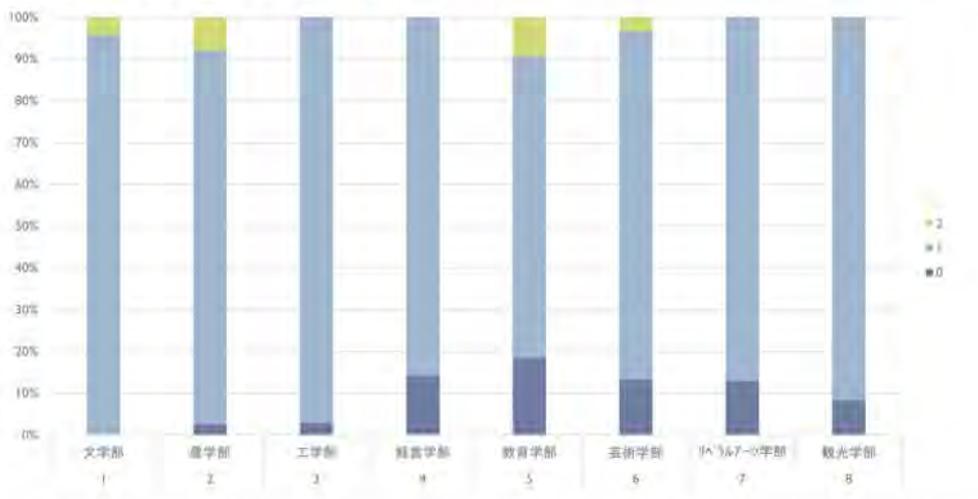
Tamagawa University

非常勤教員のアクティブ・ラーニング・ワークショップの実施

- 2017年度より実施(任意参加)
 - 2017年度の参加者数:60名
「アクティブ・ラーニングの取り組みについて」
 - 2018年度の参加者数:40名(内、16名は2017年度も受講)
「本学におけるアクティブ・ラーニングの取り組みについて」

ルーブリック・ワークショップの例(～2018年度) (AP終了までに専任教員全員が参加目標)

- 「ルーブリック評価スタートアップ～評価の原則から組織の活用まで～」(延べ9度の実施)



学修成果の可視化の方法とツール

- 授業の成績評価においては、単に知識・理解にとどまらず、汎用的技能、態度・志向性をも含めた評価を行うことを目指す。
- 本学における学修成果は、卒業時に能力到達度テスト等を実施して把握するものではなく、個々の授業を通して評価・獲得する考えである。それらの集大成としてDP(「卒業認定・学位授与の方針」)が担保されると考える。
- 個々の授業における到達目標をどれくらい達成できたのかを数値化
 - 数値化のロジックはGPAの算出方法を採用。
 - 到達目標の達成度を測定する方法は、試験、レポート、ルーブリック評価、パフォーマンス評価等で、科目担当者に一任
 - 評価基準はシラバスに明示

学修成果の可視化の方法とツール

- 学生の学びを実質化するため、履修登録単位数に縮減を図っている。
- 学修成果の把握のため、GPAによる学修警告制度と卒業要件を設けている。
- 学内ネットワーク上に学生用ポートフォリオを設け、学生自身が学修状況や学生生活を自己評価することができ、担任による学生面談にも活用される仕組みを整えている。
- 学修成果の把握に客観性を持たせるために、毎年在学者全員に学習行動調査として在学生調査(大学IRコンソーシアム)、卒業生調査(2014・2017・2019年度の3回実施)、外部試験として英語(ELF)科目受講者にはTOEICを、3年次に任意でPROGテストを、全学部1年次生全員に語彙読解力検定を(2019年度は日本語運用能力テスト)受験させている。

◎目標としての学修成果の可視化 学士力（コンピテンシー）の策定

本学が育成する主な内容：DPの基準

知識・理解	汎用的能力	態度・志向性
<ul style="list-style-type: none">多文化・異文化に関する知識の理解人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	<ul style="list-style-type: none">問題解決力コミュニケーション・スキル（読む、書く、話す、聴く）数量的スキル情報リテラシー論理的思考力	<ul style="list-style-type: none">自己管理能力チームワークリーダーシップ倫理観市民としての社会的責任生涯学習力



DP, CP, APとの整合性・体系性に配慮

カリキュラムの体系化

■ カリキュラムの整備

- カリキュラム・マップとカリキュラム・ツリーの明示
 - カリキュラム・マップ ⇨ DPを実現するカリキュラムの整合性
 - カリキュラム・ツリー ⇨ DPを実現するカリキュラムの体系性

■ カリキュラムと各授業

- カリキュラム・マップをもとに、各授業の到達目標、授業内容、授業方法、成績評価基準を設定する。各学部・学科のDPはすべての開講授業科目の到達目標で実現される。
- シラバスA: 履修登録に向けて
- シラバスB: 履修登録後の受講と授業外学修に向けて

教育課程表 (カリキュラム・マップ)

工学部マネジメントサイエンス学科 教育課程表

●: 必修科目 ●: 必修選択科目 ○: 選択科目 □: 特許取得課程 一: 修得不能 (集中) 二: 集中特修

学年	科目名	単位数	属性	能力項目			
				汎用的技能	専門的知識	態度・志向性	その他
エニバーシティ・スタディー・プログラム							
PHL 2011	現代文明論	2	必修				
HST 101	歴史 (世界)	1	必修				
HST 103	歴史 (日本)	1	必修				
IS 101	情報科学入門	1	必修				
IS 103	データ処理	2	必修				
CHEM 101	化学入門	2	必修				
ENV 101	環境科学	1	必修				
MATH 101	数学入門	2	必修				
MATH 103	線形代数入門	2	必修				
MATH 105	代数学入門	2	必修				
PHYS 101	物理学入門	2	必修				
UNIV 111	英語 I (1)	1	必修				
UNIV 113	英語 II (2)	1	必修				
ENV 103	環境 I	2	必修				
ENV 105	環境 II	2	必修				
ENV 107	環境コミュニケーション	2	必修				
ENV 109	環境倫理 I	2	必修				
選択科目							
ENGR 111	導入ゼミ	2	必修				
ENGR 113	工学基礎演習	1	必修				
MATH 113	線形代数	2	必修				
CARE 113	キャリアデザイン	2	必修				
ENGR 112	工学基礎 I	2	必修				
IS 112	プログラミング I	2	必修				
ENGR 114	工学基礎 II	2	必修				
MATH 114	数学基礎	2	必修				
MATH 115	代数学 I	2	必修				
PHYS 112	物理学 I	2	必修				
MASC 215	経営システム I (卒業特修)	2	必修				
ENGR 221	卒業特修 I	2	必修				
MASC 217	経営情報システム II	1	必修				
MASC 219	卒業特修 II	1	必修				

学士力
(授業を通して
修得できる力)

全ての授業科目
に、主にどのよ
うな力が修得で
きるかを明示

学士力 (「授業を通して修得できる力」) の能力項目の設定状況

各授業で3つを上限に設定されている「授業を通して修得できる力」について、2019年度教育課程表に基づき件数を表した。総体としては、知識理解(文化・社会・自然)、汎用的技能(コミュニケーション・スキル、論理的思考力、問題解決力)に偏っている。



◎評価対象としての学修成果の可視化 4年卒業率とGPA

4年卒業率

	4年卒業率	備考
2011年度入学生	82.7%	
2012年度入学生	83.8%	
2013年度入学生	81.6%	特別学期制度スタート
2014年度入学生	85.5%	
2015年度入学生	85.4%	特別学期開講数の増加

GPAの伸び率（学部）

	平均GPA（1年終了時）	平均GPA（4年終了時）	GPAの伸び
文学部	2.70	2.84	0.14
農学部	2.85	2.87	0.02
工学部	2.57	2.80	0.23
経営学部	2.39	2.66	0.27
教育学部	2.97	3.12	0.15
芸術学部	2.73	2.88	0.15
リハビリーツ学部	2.63	2.83	0.20
観光学部	2.78	3.01	0.23

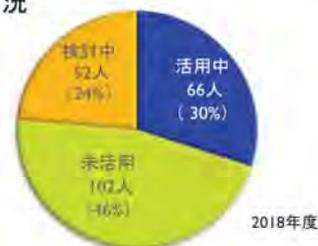
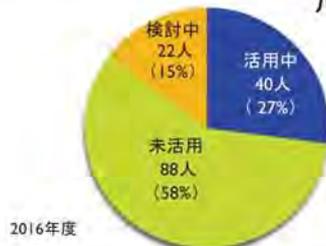
※2015年度入学生(2018年度卒業生)

ループリックの活用（アンケート）

- ▶ 目的：評価におけるループリック指標の活用実態を把握し、今後の活用の拡大に資することを目的とする。

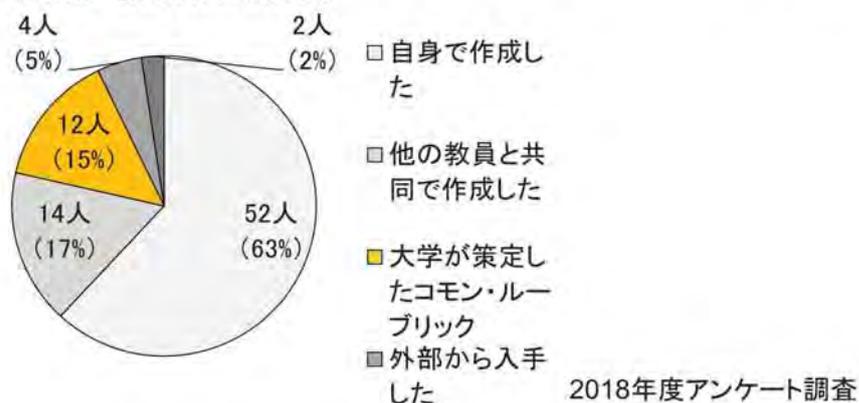
	2016年度	2018年度
調査対象	1,078名（専任293、非常勤785）	762名（専任267、非常勤495）
調査期間	2016年12月2日～22日	2019年1月24日～2月6日
回答者数	150名（13.9%）	220名（28.9%）

ループリックの活用状況



コモン・ルーブリックの作成

- ▶ 2016年度の教員調査結果において、ルーブリックの活用が進んでいないと判断。
- ▶ 2017年度に「学士力」に関するコモン・ルーブリックを作成し、2018年度から活用を開始。



▶ 21

Tamagawa University

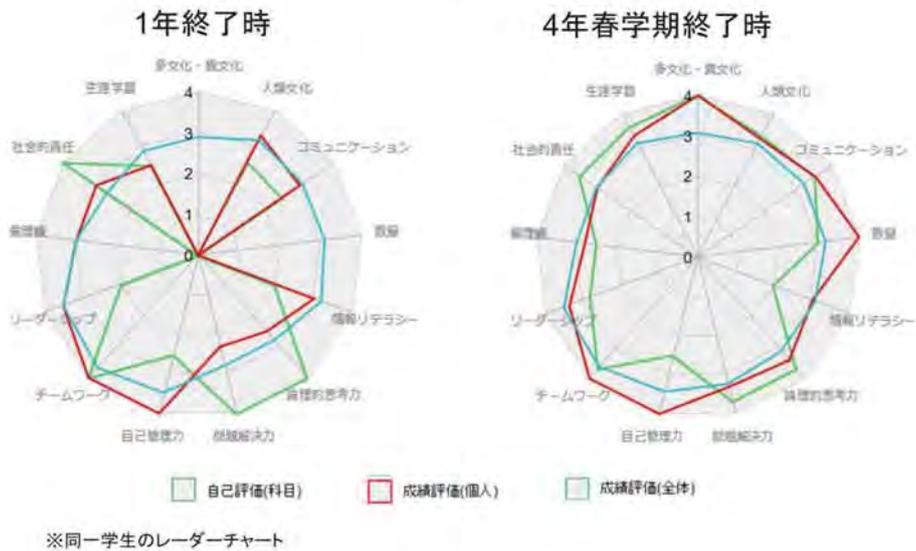
学生ポートフォリオの構成

項目	内容
Student Life	(1) 目標設定と振り返り 学期の初めに、指定された項に対して自分で目標を設定し、学期末に目標を達成できたかどうかを振り返り、自己評価します。 科目の成績評価と同様に、S、A、B、C、Fの5段階評価で入力してください。
Learning	(1) 授業振り返りシート 履修登録をした全科目に対して毎回の授業が終わった後に、授業の感想、授業外学修の内容と費やした時間等を記録していきます。 科目の成績評価に加味されますので、科目担当教員の指示に従って、期日までに記入してください。
	(2) 科目自己評価 学期末に履修登録をした全科目に対して自己評価をします。 科目の成績評価と同様に、S、A、B、C、Fの5段階評価で入力してください。 入力することにより、実際の成績評価と自己評価を比較することができます。
総合評価シート	それぞれの項目ごとに「総合評価シート」として、次のような図で示されます。 (1) 成績評価レーダーチャート (2) 科目自己評価レーダーチャート (3) Student Life レーダーチャート (4) GPA 経年変化折れ線グラフ 自分の記録を振り返り、以降の学修状況と学生生活に役立つように活用してください。

▶ 22

Tamagawa University

学修成果 (2016年度入学生) (成績評価レーダーチャート)

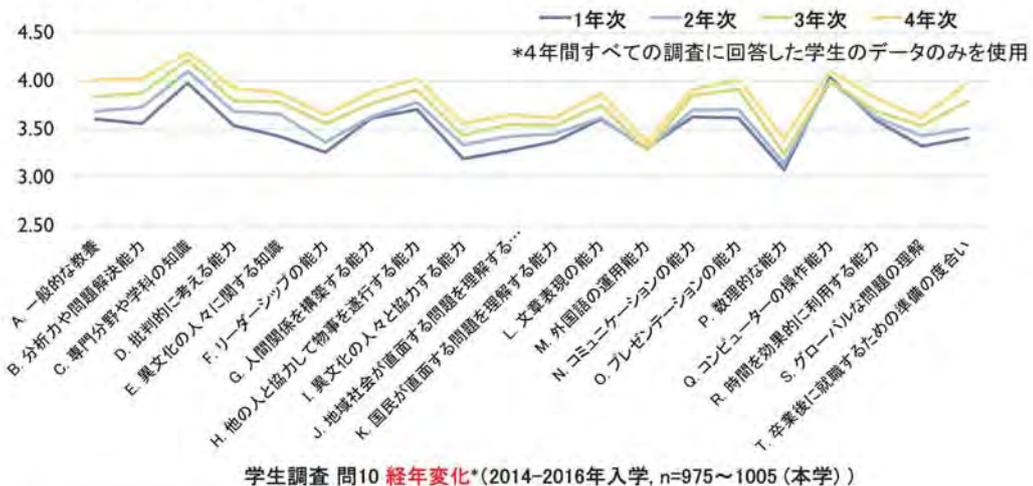


▶ 25

Tamagawa University

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

- 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。

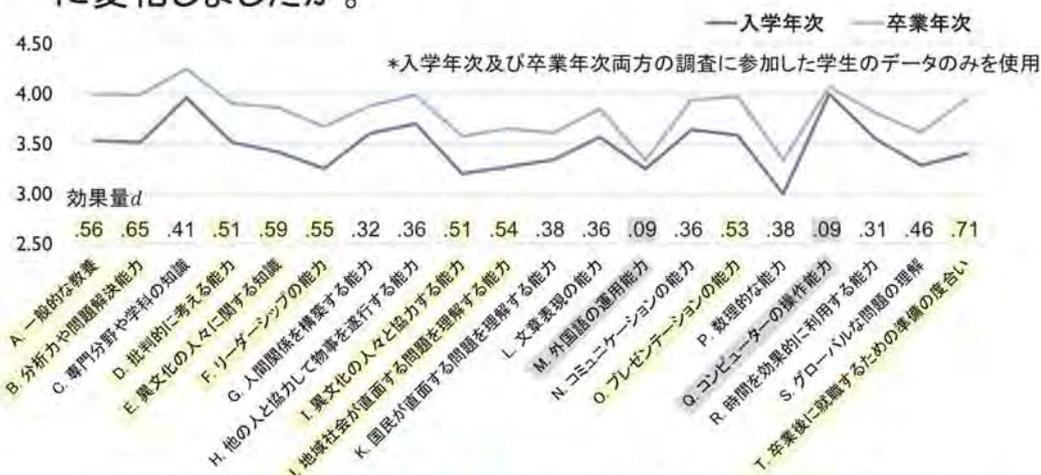


▶ 26

Tamagawa University

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

■ 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。



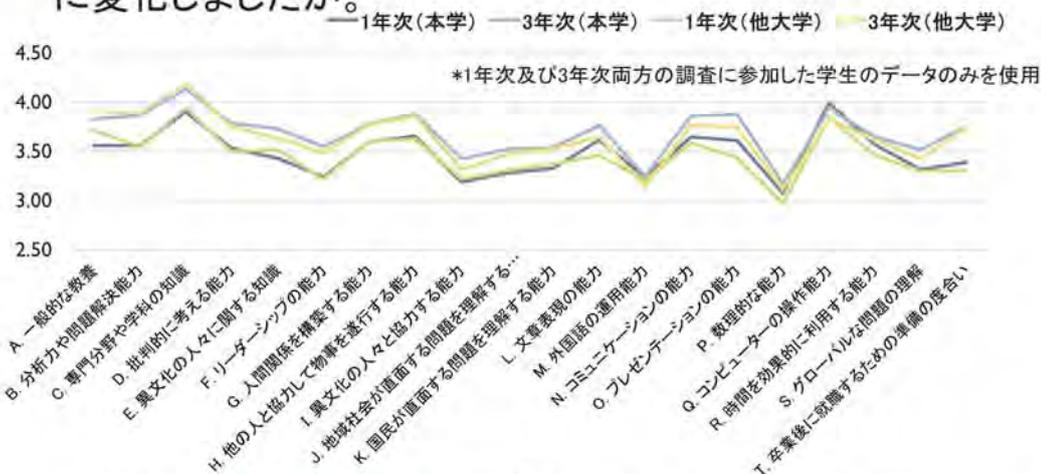
学生調査 問10 入学年次-卒業年次比較* (2014-2016年入学者, n=1680~1711(本学))

効果量dの目安 (Cohen) : 0.2-小さな効果, 0.5-中程度の効果, 0.8-大きな効果
Tamagawa University

▶ 27

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

■ 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。



学生調査 問10 1年次-3年次比較* (2014-2015年入学者, n=1375~1396(本学), n=9459~9424(他大学**))

**13大学(国公立4、私立9)のデータを使用
Tamagawa University

▶ 28

大学IRコンソーシアム学生調査（問11）内容①

※ [11]あなたの英語能力を聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力の5つの観点から自己評価した場合に、現在、到達していると思うレベルを1つずつ答えてください。

A. 聞く力	回答種
A1 はっきりと、ゆっくり話してもらえれば、聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。	1
A2 最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。	2
B1 身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。	3
B2 テレビのニュースや時事問題、標準語の映画ならほとんど理解できる。	4
C1 特別な努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。	5
C2 母語話者の速いスピードで話されても、どんな種類の話し言葉も難無く理解できる。	6

B. 読む力	回答種
A1 掲示やポスター、カタログなどの中よく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。	1
A2 ごく短い簡単な文章や、簡単に短い個人的な手紙は理解できる。	2
B1 日常語や、自分の知っている分野の文章なら理解できる。簡単に個人的な手紙を理解できる。	3
B2 現代の問題についての記事や報告が読める。現代文学の散文は読める。	4
C1 複雑な文章を理解できる。自分の関連外の分野の専門の記事も理解できる。	5
C2 抽象的で複雑な文章など、あらゆる形式で書かれた言葉を容易に読むことができる。	6

▶ 29

Tamagawa University

大学IRコンソーシアム学生調査（問11）内容②

C. 会話力	回答種
A1.1 決まった言い回しを使って自己紹介をしたり、相手の趣味を尋ねたりできる。	1
A1.2 家族や身の回りのことについて、簡単な質問なら聞いたり答えたりできる。	2
A2.1 短い社交的なやり取りができる。ひとりで会話を続けにくい。相手の助け舟で、身近な話題について話し続けられる。	3
A2.2 準備をすれば、日常的でなじみのある話題について、簡単な言葉を使ってまとまりのある会話ができる。	4
B1 日常生活に直接関係のあることや個人的な関心について、準備なしで会話ができる。	5
B2 身近な話題の議論に積極的に参加し、自分の意見を説明できる。	6
C1 社会上、目的・場面に合った言葉遣いができ、自分の考えや意見を正確に表現できる。	7
C2 いかなる会話や議論でも努力しないで加わることができる。	8

D. 表現力	回答種
A1 住んでいるところ、また、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って表現できる。	1
A2 家族、周囲の人々、居住条件を簡単な言葉で説明できる。	2
B1 簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、目標を語るすることができる。	3
B2 興味関心のある話題について、明瞭で詳細な説明ができる。	4
C1 複雑な話題を、一定の観点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。	5
C2 論理的な会話で聞き手に重要点を把握させ、記憶にとどめさせることができる。	6

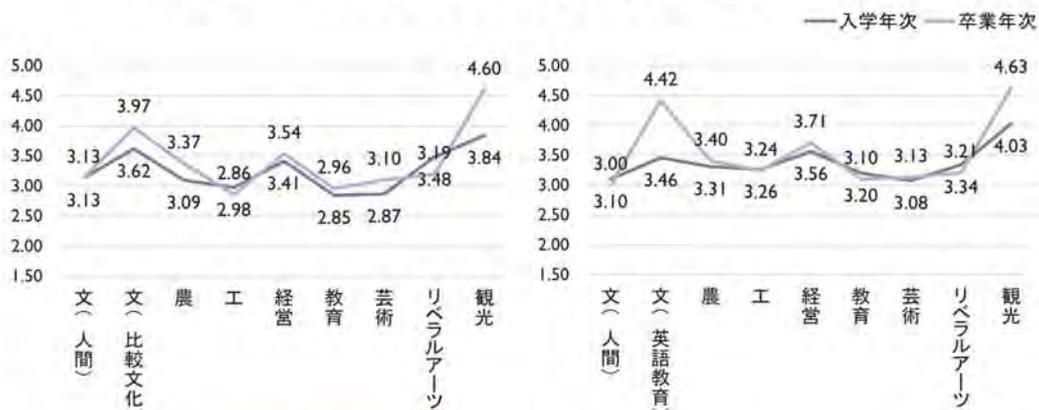
E. 書く力	回答種
A1 お祝いのメッセージなど、短い簡単な葉書を書くことができる。	1
A2 簡単に短いメモやメッセージ、短い個人的な手紙なら書くことができる。	2
B1 身近で個人的に関心のある話題を書くことができる。個人的な手紙で経験や印象を書くことができる。	3
B2 興味関心のある話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。	4
C1 手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。	5
C2 論理的に事情を説明し、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。	6

▶ 30

Tamagawa University

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

- 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。問10 M. 外国語の運用能力

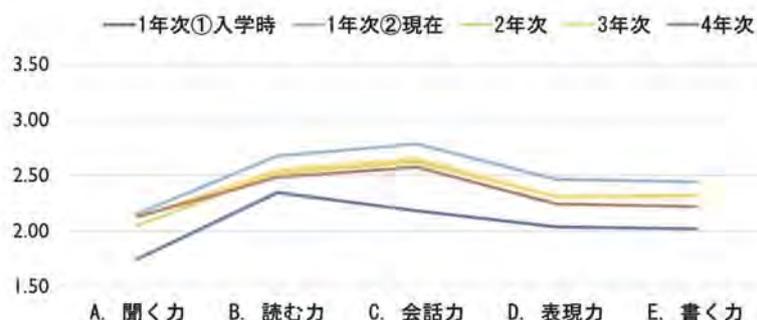


学生調査 問10M 学部別入学年次-卒業年次比較*(左:2014年入学者, n=15~128, 右: 2015-2016年入学者, n=20~275)

*入学年次及び卒業年次両方の調査に参加した本学学生のデータのみを使用

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

- 問11 英語力に関する設問

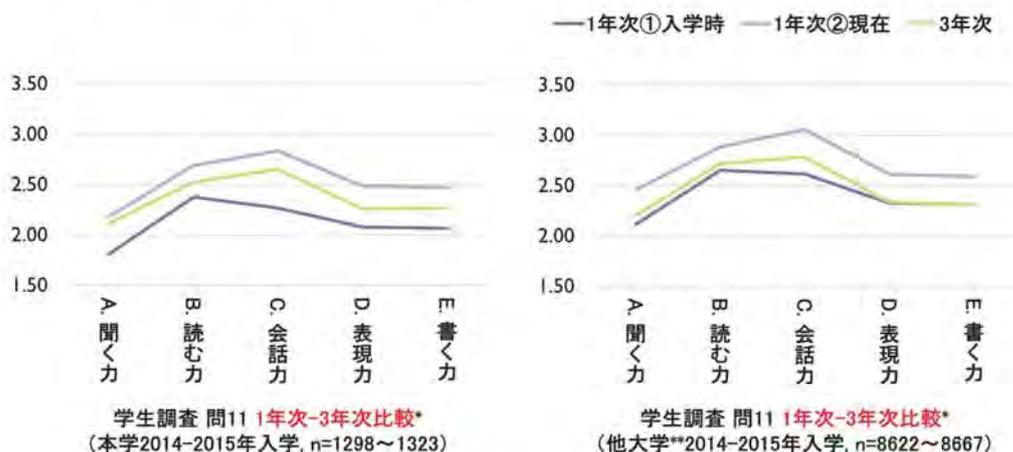


学生調査 問11 経年変化*(2014-2016年入学, n=934~960)

*4年間すべての調査に回答した本学学生のデータのみを使用

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

■ 問11 英語力に関する設問



*1年次及び3年次両方の調査に参加した学生のデータのみを使用

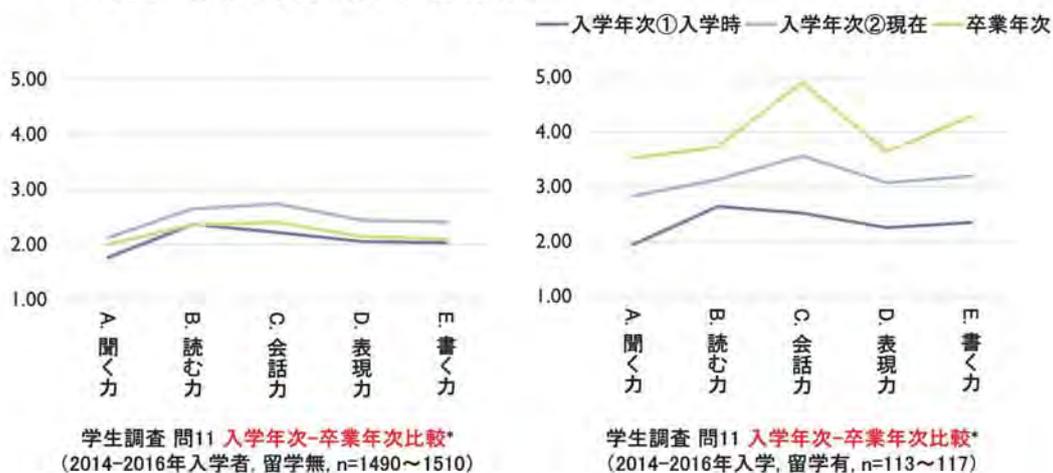
▶ 33

Tamagawa University

**13大学(国公立4、私立9)のデータを使用

能力と知識の変化 (大学IRコンソーシアム学生調査)

■ 問11 英語力に関する設問



*入学年次及び卒業年次両方の調査に参加した本学学生のデータのみを使用

▶ 34

Tamagawa University

英語 (ELF) 科目の学年配置 (2018年度入学生)

学部	学科	履修終了 最短学年	ELFレベル	単位数	備考
文	国語教育	1年次	指定なし	8	
	英語教育	2年次	102以上含む	12	
農	生産農	2年次	201以上含む	8	
	生産農(理プロ)	1年次	指定なし	4	
	環境農	1年次	201以上含む	8	
	先端食農	2年次	201以上含む	8	
工	情報通信工	1年次	指定なし	4	
	ソフトウェアサイエンス	1年次	指定なし	4	
	マネジメントサイエンス	1年次	指定なし	4	
	エンジニアリングデザイン	1年次	指定なし	4	
経営	国際経営	2年次	指定なし	16	TOEIC®L&R700以上が望ましい
教育	教育	1年次	指定なし	8 or 4	教職97 免許希望者で条件をクリアした場合、1科目免除となる
	乳幼児	1年次	指定なし	4	
芸術	パフォーマンス・アート	1年次	指定なし	8	
	メディア・デザイン	1年次	指定なし	8	
	芸術教育(免許)	1年次	指定なし	4	免許の学生のみ必修
リハビリアート	リハビリアート	1年次	301を含む	4	
観光	観光	2年次	201以上	12	TOEIC®L&R700以上が卒業要件

▶ 35

Tamagawa University

学習行動 (大学IRコンソーシアム学生調査)

▶ アクティブ・ラーニングに関する学修成果

学生調査 問7(4年間平均)と問10(卒業年度)の相関行列* (2014~2016年入学, n=1039~1049)

相関係数 (ピアソン)	問10(卒業年度)																			
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
A	.14	.15	.22	.06	-.02	.05	.11	.10	.01	.04	.00	.06	-.05	.06	.12	.16	.11	.06	-.04	.05
B	.26	.27	.32	.15	.14	.18	.21	.26	.12	.17	.14	.16	.00	.23	.19	.06	.13	.15	.13	.24
C	.26	.21	.23	.10	.13	.19	.18	.22	.12	.21	.16	.19	.04	.17	.17	.09	.07	.12	.16	.18
D	.05	.02	.00	-.01	-.03	.07	.08	.01	.05	.10	.06	.01	-.03	.05	.02	.05	.00	.03	.03	.04
E	.26	.27	.25	.16	.14	.07	.16	.17	.09	.16	.12	.27	.09	.10	.26	.14	.17	.11	.16	.13
F	.20	.22	.14	.17	.11	.08	.11	.13	.04	.11	.08	.14	.14	.09	.25	.22	.19	.09	.18	.11
G	.15	.14	.17	.12	.08	.06	.10	.08	.08	.07	.08	.11	.09	.03	.14	.21	.13	.04	.10	.04
H	.25	.27	.22	.19	.21	.19	.20	.26	.21	.23	.18	.20	.13	.24	.30	.04	.09	.13	.19	.18
I	.17	.22	.20	.20	.21	.20	.19	.27	.17	.19	.14	.16	.03	.23	.20	-.06	.04	.14	.13	.19
J	.13	.11	.05	.13	.10	.13	.10	.14	.15	.14	.15	.09	.08	.09	.10	.09	.03	.12	.13	.12
K	.13	.14	.13	.10	.09	.12	.13	.17	.15	.18	.17	.10	.05	.11	.09	.06	.04	.09	.15	.11
L	-.10	-.04	-.13	.01	.00	-.01	-.01	-.02	.05	-.01	-.05	-.09	-.03	-.02	-.05	-.07	-.04	-.05	-.02	-.10
M	.08	.12	.14	.08	.15	.10	.12	.12	.08	.06	.06	.10	.05	.14	.13	.00	.07	.09	.08	.14
N	.05	.09	.07	.05	-.03	.01	.02	.02	-.02	.00	.00	.04	.04	-.02	.07	.23	.06	.00	.02	-.02

アクティブラーニング関連項目

*4年間すべての調査に回答した学生のデータのみを使用

▶ 36

Tamagawa University

大学IRコンソーシアム学生調査（問7）内容

[7] あなたが受講した大学の授業で、次のようなことを経験する機会はどのくらいありましたか。

		ひんばんに あった	ときどき あった	あまり なかった	まったく なかった
A.	実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ	4	3	2	1
B.	仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ	4	3	2	1
C.	授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する	4	3	2	1
D.	授業の一環でボランティア活動をする	4	3	2	1
E.	学生自身が文献や資料を調べる	4	3	2	1
F.	定期的な小テストやレポートが課される	4	3	2	1
G.	教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する	4	3	2	1
H.	学生が自分の考えや研究を発表する	4	3	2	1
I.	授業中に学生同士が議論をする	4	3	2	1
J.	授業で検討するテーマを学生が設定する	4	3	2	1
K.	授業の進め方に学生の意見が取り入れられる	4	3	2	1
L.	取りたい授業を履修登録できなかった	4	3	2	1
M.	出席することが重視される	4	3	2	1
N.	TAやSAなどの授業補助者から補助を受ける	4	3	2	1

▶ 37

Tamagawa University

大学IRコンソーシアム学生調査（問10）内容

[10] 入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。

		大きく増えた	増えた	変化 なし	減った	大きく減った
A.	一般的な教養	5	4	3	2	1
B.	分析力や問題解決能力	5	4	3	2	1
C.	専門分野や学科の知識	5	4	3	2	1
D.	批判的に考える能力	5	4	3	2	1
E.	異文化の人々に関する知識	5	4	3	2	1
F.	リーダーシップの能力	5	4	3	2	1
G.	人間関係を構築する能力	5	4	3	2	1
H.	他の人と協力して物事を遂行する能力	5	4	3	2	1
I.	異文化の人々と協力する能力	5	4	3	2	1
J.	地域社会が直面する問題を理解する能力	5	4	3	2	1
K.	国民が直面する問題を理解する能力	5	4	3	2	1
L.	文章表現の能力	5	4	3	2	1
M.	外国語の運用能力	5	4	3	2	1
N.	コミュニケーションの能力	5	4	3	2	1
O.	プレゼンテーションの能力	5	4	3	2	1
P.	数理的な能力	5	4	3	2	1
Q.	コンピュータの操作能力	5	4	3	2	1
R.	時間を効果的に利用する能力	5	4	3	2	1
S.	グローバルな問題の理解	5	4	3	2	1
T.	卒業後に就職するための準備の度合い	5	4	3	2	1

▶ 38

Tamagawa University

PROG分析

累積GPAとPROGテストの相関 (2015~2018年度の3年生)

累積GPAとの相関係数

** 相関係数は1%水準で有意
* 相関係数は5%水準で有意

0.2以上
0.1未満

0.1以上
0.05未満

0.05以上

玉川大学 全学部	n数	リテラシー										IRコンソーシアム											
		総合 収束力	情報 分析力	読解 発見力	読解 発見力	読解 発見力	SPI-言語 理解力	SPI-数量 理解力	総合	対人 基礎力	対自己 基礎力	対課題 基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力				
													読解力	協働力	読解力	感情 制御力	自信 醸成力	行動 持続力	課題 発見力	計画 立案力	実行力		
15年受験 全体	517	-0.01	0.00	-0.05	-0.03	0.03	-0.04	-0.04	0.08	0.09*	0.09	-0.03	0.04	0.06	0.11*	0.09	0.08	0.05	-0.02	-0.03	0.01		
16年受験 全体	354	0.04	-0.02	0.00	0.02	0.01	0.01	0.02	-0.04	-0.07	-0.01	-0.01	-0.07	0.00	-0.03	0.05	-0.03	-0.02	-0.03	-0.03	-0.04		
17年受験 全体	473	0.06	-0.08	0.02	0.06	0.08	0.04	-0.03	0.01	0.01	0.00	-0.03	0.01	0.07	-0.04	0.00	0.04	-0.02	-0.04	-0.03	0.00		
18年受験 全体	454	-0.05	0.07	-0.04	-0.07	-0.04	-0.01	-0.18**	0.06	0.07	0.04	0.03	0.07	0.07	0.02	0.02	0.00	0.04	0.06	0.00	-0.01		
総合 ALL	1418	0.01	-0.02	-0.03	-0.02	0.01	-0.01	-0.06*	0.01	0.01	0.01	-0.02	0.00	0.03	0.01	0.02	0.01	0.00	-0.01	-0.03	-0.01		
総合 未履修 ALL	440	-0.06	0.02	-0.07	-0.01	0.00	-0.03	-0.1*	0.06	0.1*	0.08	0.02	0.08	0.12*	0.06	0.08	0.07	0.06	0.03	0.00	0.01		
15年受験ゼミ履修	333	-0.02	-0.01	-0.04	-0.01	-0.01	-0.04	0.02	0.09	0.11	0.08	-0.02	0.03	0.08	0.12*	0.09	0.07	0.06	-0.02	0.00	0.02		
15年受験ゼミ未履修	178	0.20	0.05	-0.06	-0.06	0.10	-0.11	-0.16*	0.03	0.05	0.06	-0.07	0.02	0.04	0.07	0.05	0.07	-0.01	-0.04	-0.10	-0.02		
16年受験ゼミ履修	361	0.02	-0.02	0.00	0.03	0.00	0.01	0.02	-0.05	-0.07	-0.02	-0.05	-0.06	0.00	-0.03	0.04	-0.03	-0.03	-0.04	-0.04	-0.05		
16年受験ゼミ未履修	5	-0.13	0.14	-0.44	-0.46	0.33	-	0.35	0.53	0.02	0.03	0.03**	-0.01*	0.02	0.51	-0.24	-0.41	0.40	0.80	0.33*	0.59*		
17年受験ゼミ履修	484	0.05	-0.07	0.01	0.05	0.05	0.02	-0.06	0.01	0.01	-0.01	-0.02	0.01	0.06	-0.04	-0.01	0.04	-0.03	-0.04	-0.03	0.00		
17年受験ゼミ未履修	11	0.53	-0.04	0.32	0.3*	0.30	0.16**	0.64*	0.30	0.28	0.30	0.15	0.27	0.55	-0.24	0.40	0.23	0.25	0.03	0.05	-0.28		
18年受験ゼミ履修	251	0.01	0.13*	0.00	-0.01	0.00	0.00	-0.09	0.05	0.01	0.06	0.08	-0.01	-0.05	0.03	0.01	0.00	0.04	0.15*	0.02	0.00		
18年受験ゼミ未履修	245	-0.13*	0.00	-0.13*	-0.13*	-0.00	-0.05	-0.13*	0.08	0.10	0.03	0.04	0.11	0.15*	0.03	0.05	0.02	0.04	0.00	0.03	0.01		

▶ 39

Tamagawa University

グラフの見方

基礎力の客観測定 (PROG) と主観測定 (IRコンソーシアム上級生調査 問10.入学後の能力変化) のスコアを用いて、それぞれの高低を定義し、クロス集計した結果から、各受験年度別の下記4象限の割合の変化を分析した。用いた設問と対応する基礎力は以下のように定義している。

■ 対応スキル

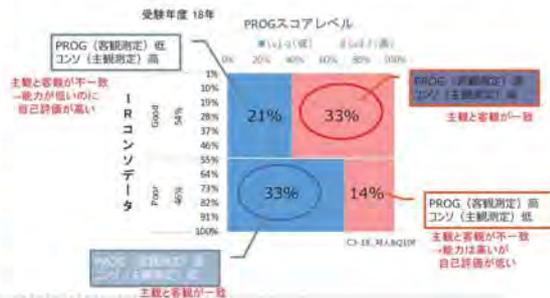
IRコンソーシアム 上級生調査	PROG
問10A) 一般的な教養	-
問10B) 分析力や問題解決能力	リテラシー総合
問10C) 専門分野や学科の知識	-
問10D) 批判的に考える能力	コンピテンシー対課題基礎力
問10E) 異文化の人々に関する知識	-
問10F) リーダーシップの能力	コンピテンシー対人基礎力
問10G) 人間関係を構築する能力	コンピテンシー対人基礎力
問10H) 他の人と協力して物事を遂行する能力	コンピテンシー対人基礎力
問10I) 異文化の人々と協力する能力	コンピテンシー対人基礎力
問10J) 地域社会が直面する問題を理解する能力	-
問10K) 国民が直面する問題を理解する能力	-
問10L) 文章表現の能力	-
問10M) 外国語の運用能力	-
問10N) コミュニケーションの能力	コンピテンシー対人基礎力
問10O) プレゼンテーションの能力	コンピテンシー対人基礎力
問10P) 数理的な能力	リテラシー総合
問10Q) コンピュータの操作能力	-
問10R) 時間を効果的に利用する能力	-
問10S) グローバルな問題の理解	-
問10T) 卒業後に就職するための準備の度合い	-

■ レベル定義

レベル	IRコンソーシアム 上級生調査	PROG
Good/高	増えた、大きく増えた	リテラシー: 5~7 コンピテンシー: 4~7
Poor/低	大きく減った、減った、変化なし	リテラシー: 1~4 コンピテンシー: 1~3

■ グラフの見方

- 縦軸はIRコンソーシアムの主観測定でのGoodとPoorの割合 (合計100%) を示している。
- 横軸はPROGの客観測定でのレベル高低のシェア (合計100%) を示している。
- グラフの面積が各象限の割合を示しており、4つの象限の%の合計は100%となるようになっている。

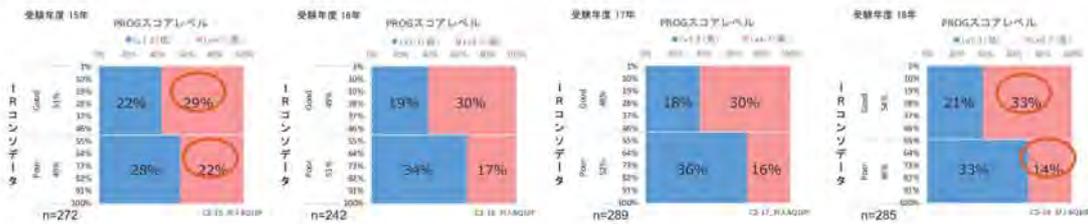


▶ 40

Tamagawa University

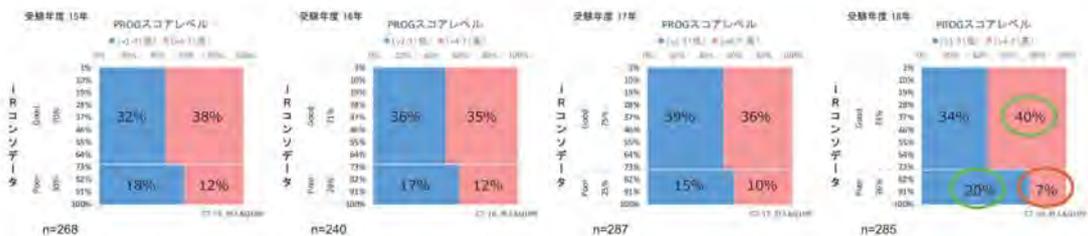
対人基礎力レベルと[問10F] リーダーシップの能力

- コンピテンシーの対人基礎力の客観測定とIRコンソーシアムの「リーダーシップの能力」の主観測定の結果を比較した。
- まず前提として縦軸を見ると、「リーダーシップの能力」に関しては主観測定はGoodとPoorの割合が拮抗しており、それぞれ50%前後となっている。ただし18年でGoodの割合が最も高く54%を占める。
- 4象限での傾向としては、主観測定も客観測定も一致して高い「PROG高・コンソGood」の割合が年々高くなっていく(15年29%→18年33%)。また、評価が一致しない「PROG高・コンソPoor」は年々低くなっており(15年22%→18年14%)、「リーダーシップの能力」に関しては主観・客観ともに齟齬なく能力が上がっている層が増えていると言えそうだ。



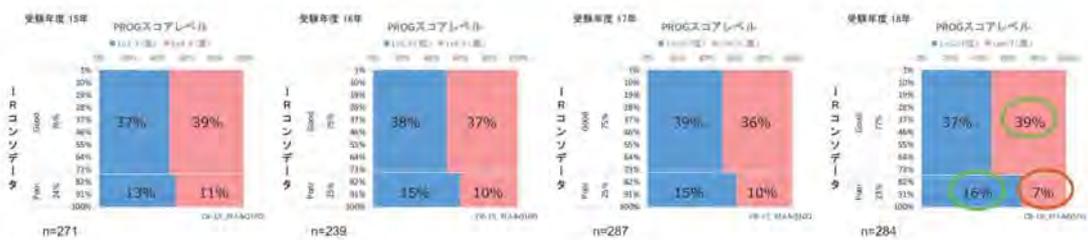
対人基礎力レベルと[問10N] コミュニケーションの能力

- コンピテンシーの対人基礎力の客観測定とIRコンソーシアムの「コミュニケーションの能力」の主観測定の結果を比較した。
- まず前提として縦軸を見ると、「コミュニケーションの能力」に関しては主観測定は高い傾向が見られ、どの受験年度でもGoodの割合が70%台を占めている。
- 4象限での傾向としては、15～17年の構成比については大きな傾向は変わらないものの18年に特徴がみられる。まず、「PROG高・コンソPoor」の割合が最も低く7%であった。また、18年は主観測定と客観測定が一致している層の割合がどちらも最も高く、その合計(「PROG高・コンソGood」+「PROG低・コンソPoor」)も最も高い。「コミュニケーションの能力」については自己理解ができている学生の割合が増えているとも考えられる。



対人基礎力レベルと[問100]：プレゼンテーションの能力

- コンピテンシーの対人基礎力の客観測定とIRコンソーシアムの「プレゼンテーションの能力」の主観測定の結果を比較した。
- まず前提として縦軸を見ると、「プレゼンテーションの能力」に関しては主観測定は高い傾向が見られ、どの受験年度でもGoodの割合が75～77%を占めている。
- 4象限での傾向としては、15～17年の構成比については大きな傾向は変わらないものの18年に特徴がみられる。まず、「PROG高・コンソPoor」の割合が最も低く7%であった。また、18年は主観測定と客観測定が一致している層の割合がどちらも最も高く、その合計（「PROG高・コンソGood」+「PROG低・コンソPoor」）も最も高い。前述の「コミュニケーションの能力」と同様「プレゼンテーションの能力」についても自己理解ができてきている学生の割合が増えているとも考えられる。



卒業生調査

■ 回答項目：大学で培った社会人基礎力について

■ 2017年度実施

対象：卒業後3年目（2014年度卒業生）

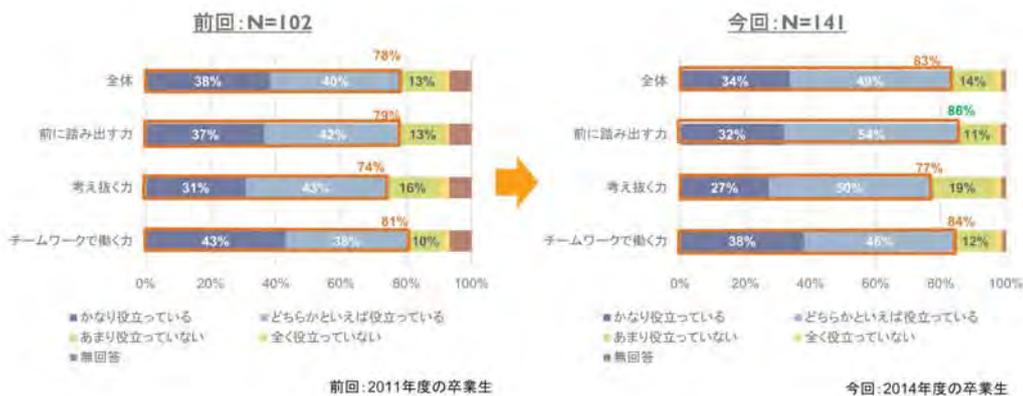
回答率：9%（n：141）

回答の男女比率（M：34%、F：66%）

能力別の役立ち度

- 役立ち度について、全体と能力別ともに、前回を上回る肯定回答の割合となりました。
- 【前に踏み出す力】の肯定回答の割合が最も多く、前回から7%(79%⇒86%)増えました。

■能力別の役立ち度

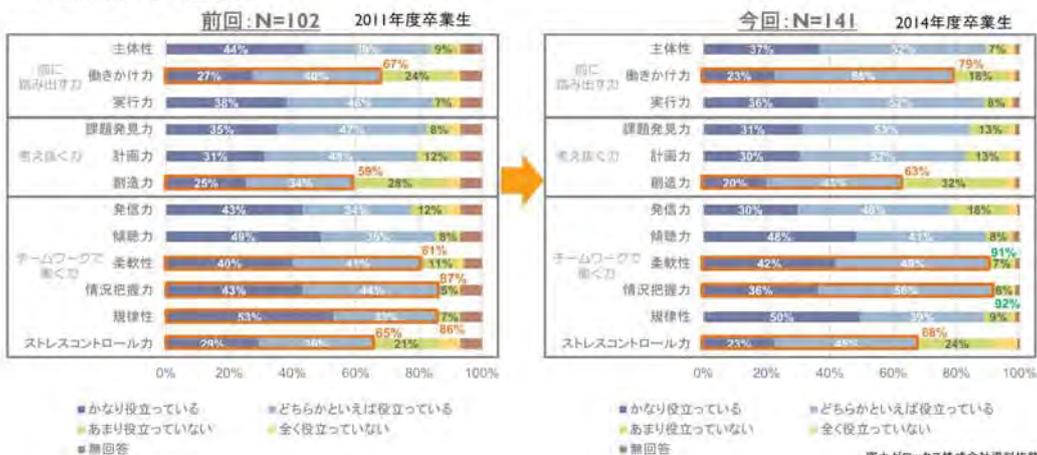


富士ゼロックス株式会社資料抜粋

能力要素別の役立ち度

- 肯定回答の割合が高い上位2項目は、【情報把握力】と【柔軟性】となりました。(前回の上位2項目は、【情報把握力】と【規律性】でした。)
- 肯定回答の割合が低い上位2項目は、【創造力】と【ストレスコントロール力】で前回同様となりました。
- 肯定回答の割合が前回比で増えた上位2項目は、【働きかけ力(12%増)】と【柔軟性(10%増)】となりました。

■能力要素別の役立ち度



富士ゼロックス株式会社資料抜粋

おわりに（課題）

- ▶ 学士力（「授業を通して修得できる力」）の能力項目にバラツキのない教育課程を策定していくこと。能力項目に重みを付けるなどの検討を行うこと。
- ▶ 授業科目の構成員である非常勤教員に対するアクティブ・ラーニングなどのワークショップの推進を図ること。
- ▶ 各授業科目（シラバス）の到達目標とカリキュラム・マップやDP（「卒業認定・学位授与の方針」）にひもづけること。
- ▶ 汎用的能力の測定について、自大学独自のもの開発は難しく、外部試験導入の検討を行うこと。
- ▶ 学修成果の測定・検証した結果を大学教育の改善（CP・DP）に繋げること。

玉川大学APフォーラム2019

2020年2月1日（土）
於：玉川大学

東京都市大学の教育改革

東京都市大学
副学長(教育担当)・教育開発機構長
皆川 勝



2

PART1 教育改革の全体像



東京都市大学の 建学の精神・教育理念

3

武蔵高等工科学校
より充実した教育を求める**学生の声**から発足
建学の精神・・・「公正・自由・自治」

教育理念
ボーダーを超えて、
学生と教職員が共に考え、学び、行動することで
社会に貢献できる人材を育てる。

**建学の精神を堅持し、時代の変化に合わせて教育改革を
志向してきた。**

本来の教育改革のベースは、中長期計画(アクションプラン2030)

4

<ビジョン> 80年を超える専門的実践教育の伝統に加えて、「都市」をキーワードに時代の要請に取り組み、国際都市東京で存在感を示す有数の大学を目指す。

教育の質保証

キャンパス教育環境向上

ブランド力向上

大学運営向上

輩出する人材像: 「自ら学び、社会の発展に貢献する、責任感と実践力を持つ人材」

施策・事業案	2020年度目標	2030年度目標
1. 都市大教育理念に則った教育プログラムの確立		
①明確な教育目標の設定 ②教育目標に応じたカリキュラムの再構築 ③新しい教育制度の導入 ④主体的な学修を促す教育方法の導入 ⑤自校教育の導入	教育理念・教育目標に沿った 教育プログラム構築	国際標準の教育プログラム 確立と展開
2. 教育の質を保証するためのマネジメントシステムの構築		
①FD活動による教育システムなどの開発 ②教育プログラムの実効性の確認 ③教員相互協力による教育能力向上 ④マネジメントシステムの第三者評価	教育の質保証が実証できる マネジメントシステム構築	内外問わず高評価の マネジメントシステム 定着

「2040年グランドデザイン」を先取りして改革に取り組む

AP事業の取り組みの背景

5

厳しい**卒研**指導
→出口での保証には
自信あり. 実績も.



社会的要請=真の実力
→4年間の**教育システム**の評
価・**成果**の完全可視化

卒業時の質保証に関する内なる自信を
「**普遍化**や**システム化**」により強固に.

高校 → **大学1~4年次** → 社会人
シームレスな接続に基づく長期視点の人材育成

社会の変革を
リードする人材

「卒業時の質保証の見える化」により、教育改革を加速化

育成してきた人材とこれから

— 「学生」を主語にした達成目標としての育成人材像 —

6

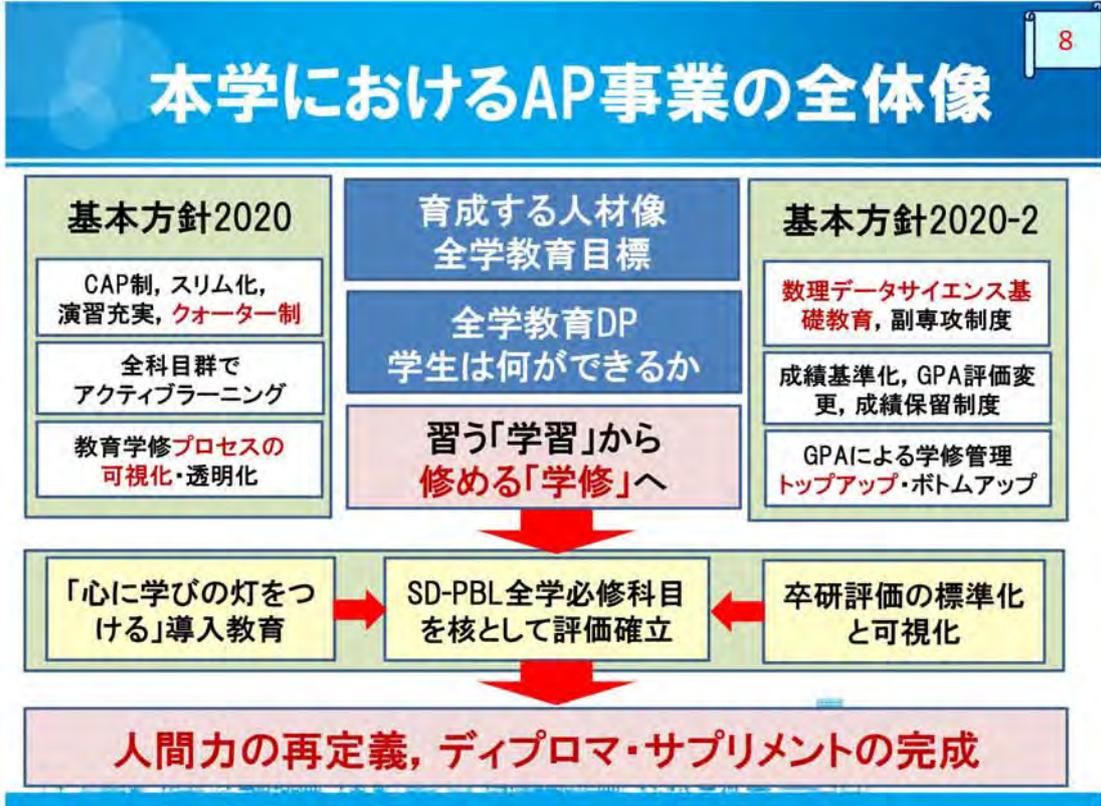
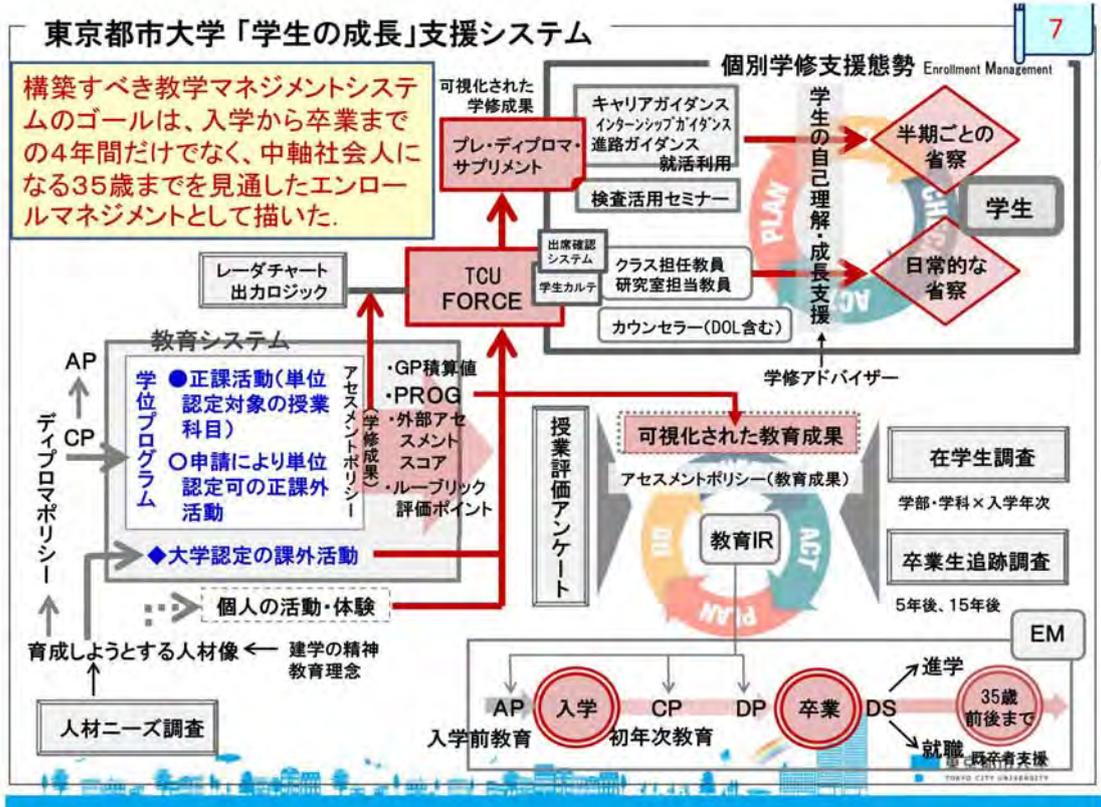
(1) 目標に向け地道・確実に行動する
(2) 成果にこだわり, やり遂げる.

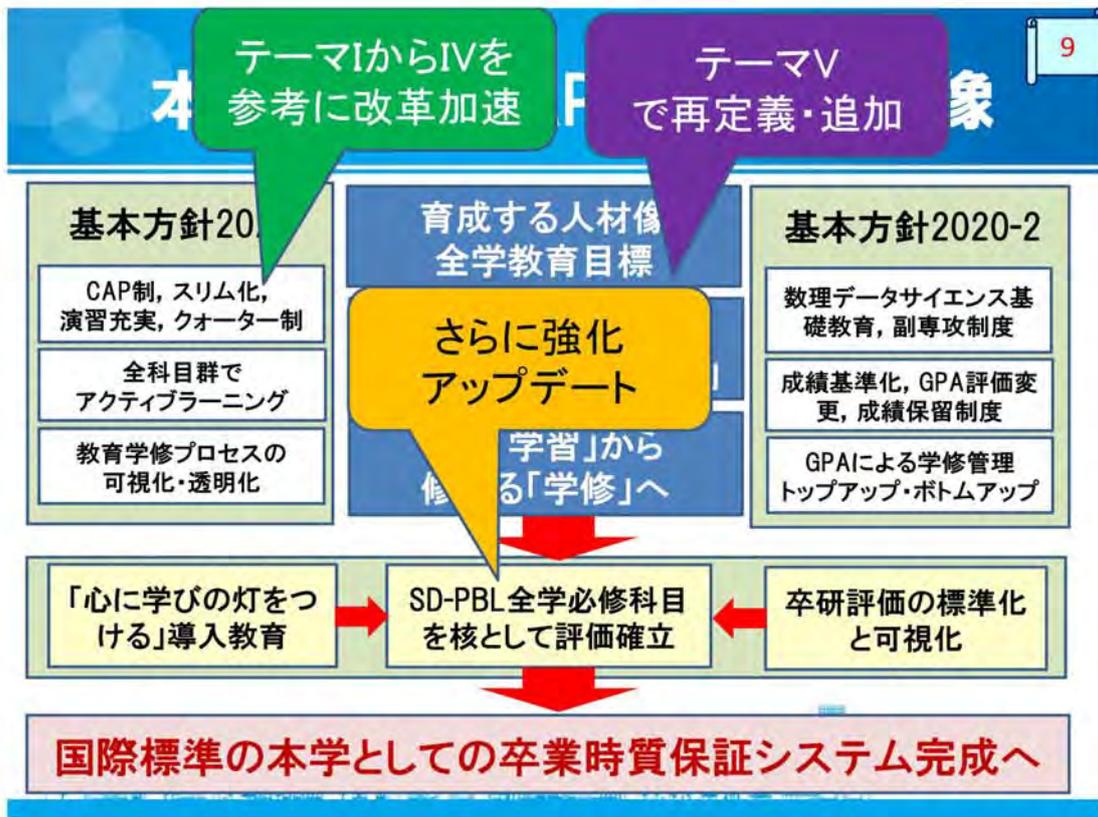
これまでも輩出
してきた人材。
これをより多数
に!

(3) 一歩前に入るリーダーシップ
(4) 生産性を高めるフォロワーシップ
(5) 旺盛なチャレンジ精神
(6) 現場・現実で活かせる国際性・教養

AP事業の取
組みによって、
都市大生に新
たなカラーを加
えていく!







すべてのボーダーを超える挑戦

11

- ・ 個人・役割のボーダー
- ・ 組織上のボーダー
- ・ 教育システム上のボーダー
- ・ 社会システムのボーダーなど



**「学生の可能性が最大限に
高まるような学習教育」
をキーワードに
すべてのボーダーを超えてゆく挑戦**

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

ボーダーを超える挑戦 —学生の可能性が最大限に高まる—

12

組織

- ・ 大学トップと現場教員
- ・ 学生と教員・職員

教育課程

- ・ 基礎・教養教育と専門教育
- ・ 理系と文系

授業

- ・ 教室の内外
- ・ 授業提供者と受講者

社会連携

- ・ 教員と実務家
- ・ 大学と実業界



ボーダーを乗り越えるための具体的な目標設定が不可欠
“Goals for Crossing Boundaries”

東京都市大学の教育目標

13

公正・誠実な人格と自己研鑽力をもち、

「都市」に集約されるような複合的課題に取り組めると共に、

多種多様なボーダーを超えて新たな価値を見出すことで

持続可能な社会の発展に貢献できる人材を育成する。

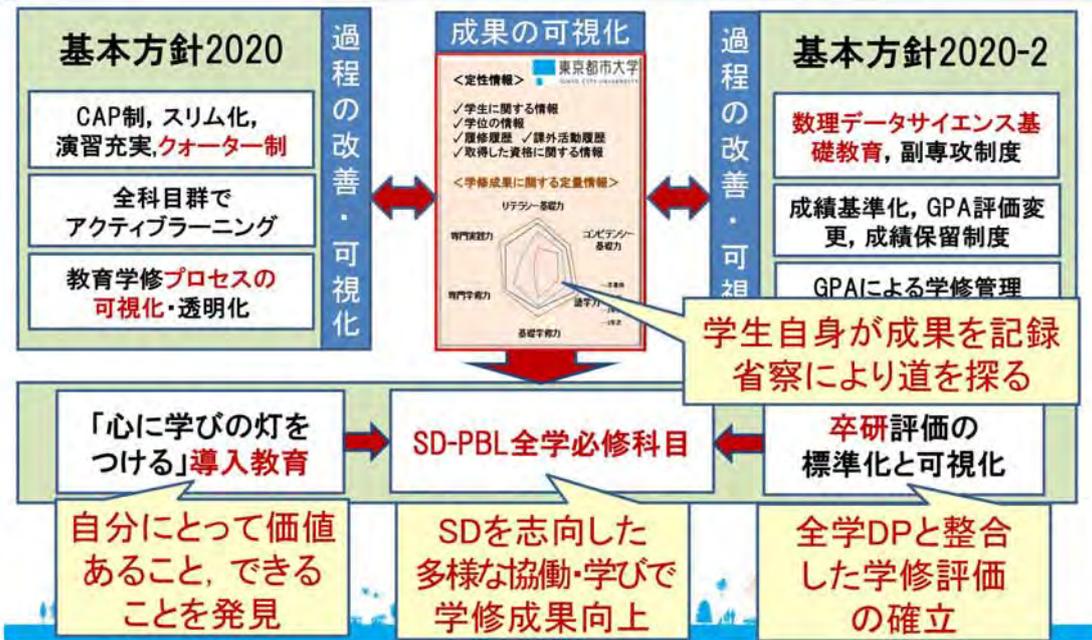
学習者中心の教育へ
本気で転換する！

社会を変革していく
リーダーを育成



本学の教育目標を達成する重点施策像

14



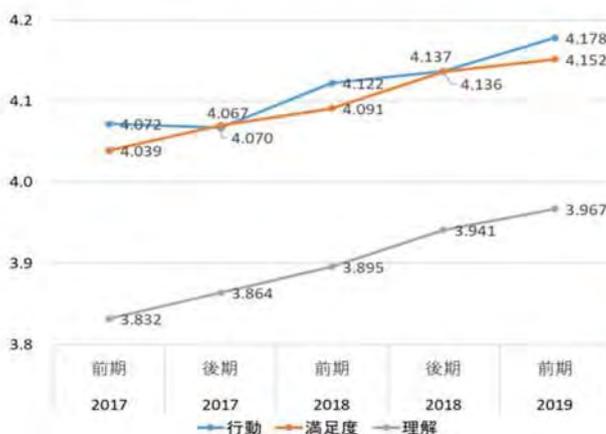
教育課程編成方針2020の成果

15



学生はどのように変化したか —授業評価アンケート結果—

16



行動:

- 遅刻や欠席をせずに出席
- 居眠りや私語をせず授業に集中した
- わからないときに質問をした

満足度:

- 総合的にみて力がついた

理解:

- 授業の内容を十分に理解

授業評価アンケートから見える教育改革の成果

さらなる教育改革の加速へ

—教育施策基本方針2020—(2018策定)

- I. クォーター制, 科目のスリム化, CAP制
- II. 学習プロセス・評価・成果の見える化の完成へ
- III. 学習者中心の体系的カリキュラムの構築
 - a) 全学共通科目としてのSD PBLの導入
 - b) 卒業研究のプロセス・評価の標準化・可視化

—教育施策基本方針2020-2—(2019策定)

- IV. 成績評価とGPA活用促進
- V. 数理・データサイエンスのリテラシー教育
- VI. 副専攻による学際教育
- VII. 社会との協働学習(社会人教育, インターンシップ)

東京都市大学 TOKYO CITY UNIVERSITY

学生協働による教育システム改善 —学生と教職員のボーダーを超えて—

- 授業評価アンケートの実施と活用に関して, 学生の代表を **学生FD委員**を任命し, **教職員と学生との協働FD懇談会**実施
- その結果の**教育改革への反映**

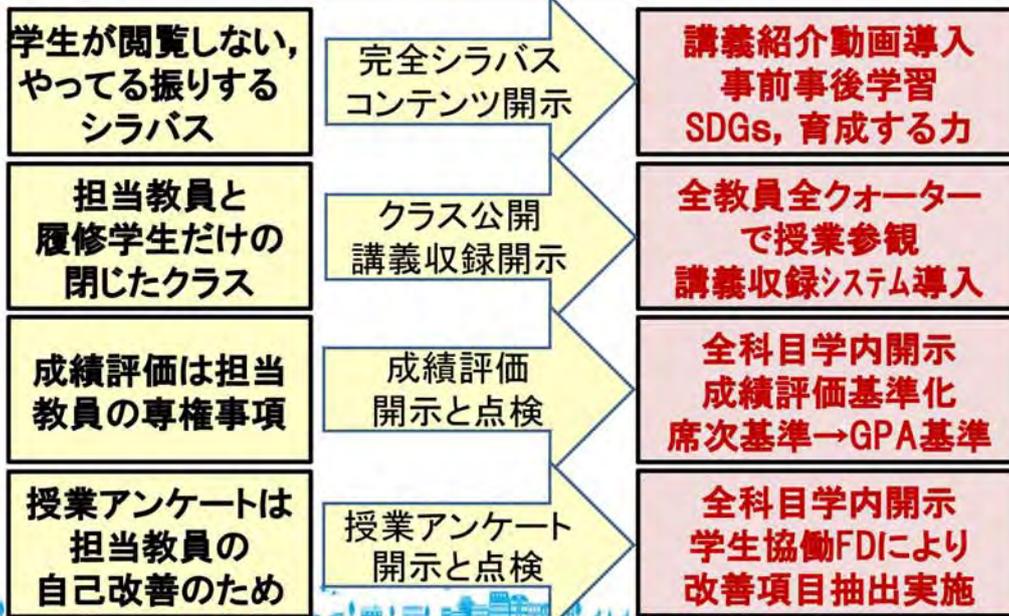
- 授業評価アンケートは中間で実施し, 学生に直接フィードバック
- 授業を教科書で読むだけの授業から反転授業へシラバス充実
- GPA評価から「判定不能」を対象外に
- GPA算入は成績が上の科目から卒業要件単位までに限定など

建学の精神「公正・自由・自治」
「私たち抜きで私たちを語らないで！」
“Nothing about students without students”

東京都市大学 TOKYO CITY UNIVERSITY

学習プロセス・評価・成果見える化 —教室空間のボーダーを超えて—

19



成績評価とGPA活用促進 —評価者と学生のボーダーを超えて—

20

成績基準化

- ・ 秀と優の割合の基準化
- ・ 授業設計の目安

GPA制度

- ・ GP[1.0から5.0]でグローバル対応
- ・ 達成度尺度は、順位からGPAへ

CAP制運用

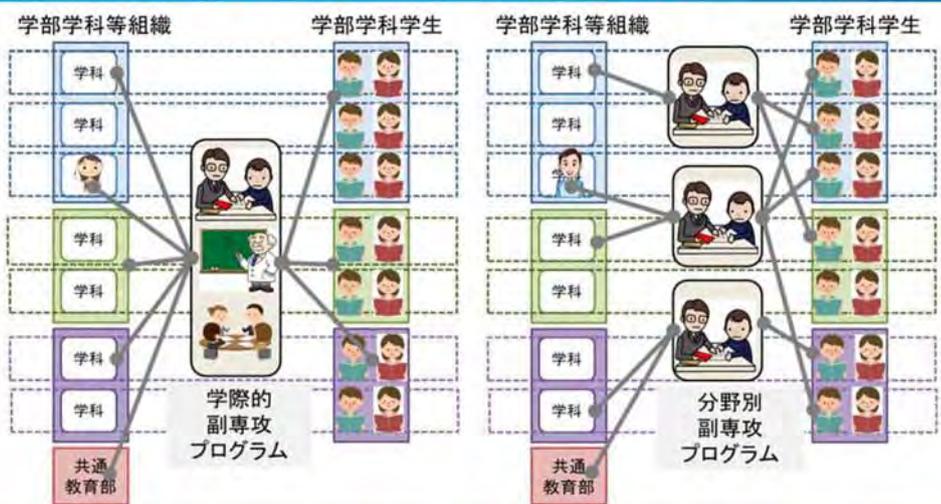
- ・ 優秀者の履修上限単位緩和
- ・ CAP制限緩和学生の追加履修促進

進級条件

- ・ 留年や卒業延期の可能性を低下
- ・ 必修科目設定の弊害を除去

学生の多様性を尊重した教育システムへのカイゼン

副専攻制度 —分野のボーダーを超えて—



学生の複眼的な思考力、統合的な理解力を育成

副専攻の構成 —分野のボーダーを超えて—

- | | |
|------------|---|
| 学際的
副専攻 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会変革のリーダー育成副専攻 ・ データサイエンス副専攻 |
| 分野別
副専攻 | <ul style="list-style-type: none"> ・ エンジニアリング副専攻 ・ 環境基礎情報デザイン副専攻 ・ 情報工学基礎副専攻 ・ 情報デザイン副専攻 ・ 情報マネジメント副専攻 ・ 都市・マーケティング副専攻 ・ 児童学基礎 |

学部学科のボーダーを超えて、学生が共に刺激しあう

数理データサイエンス教育 -文理のボーダーを超えて-

23

2020年4月より全学生必修でリテラシー教育実施

中核学部
を新設
構想

既存学
科群が
連携

文理を
超えて
教育

学部3・4年
(選択)
詳細は今後詰める

実践プログラム(分野横断型実践学習)

- ①実ビッグデータを用いた実践学習
- ②分野横断的な学習プログラムを用意

学部2・3年
(選択)
詳細は今後詰める

専門プログラム(PBLと連携した教育)

- ①基礎的または発展的副専攻プログラム用意
- ②専門に応じて専門科目課程を整備
- ③グループによる課題の設定・データ収集・解析を重視

学部1・2年
MS/DS
卒業要件

リテラシープログラム(体験と基礎)

- ①基礎知識の習得とAI(Deep learning)等の体験的学び
- ②学生の志向と基礎力に応じて、数理科学の基礎学習

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

24

PART2 ディプロマ・サプリメントの開発と Eポートフォリオの運用

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

学生の主体的学習を キャリア形成に結びつけるために

25

学修支援上の問題意識

「就職ができるだけでなく、学生が自己を理解し成長に向けて主体的・自律的に活動する力を付けて社会に出るためには、低学年（早期）からのガイド、サポートが**正課・正課外共に**十分ではない。」



AP事業での取り組み課題①

26

全体として

1. 低学年のうちから、学生が**キャリア形成を意識して主体的に開発していくための授業改善や学生支援の強化が必要**
2. そのために、学生が入学直後から**これを自分の事として行動に移せる動機づけの機会が、正課・正課外を問わず多面的に提供できることが重要**

キャリア = ①経歴(客観的側面)
②仕事に対する自己概念(主観的側面)



AP事業での取り組み課題②

高いハードル

3. 学生が自分で出来たことを、**自分だけでなく、支援にあたる教職員も確認できる仕組みづくりが必要**
4. 何より、**学生が自分で出来たことを記録し、省察に生かしていくことを習慣づけしていく仕組みづくりが重要**

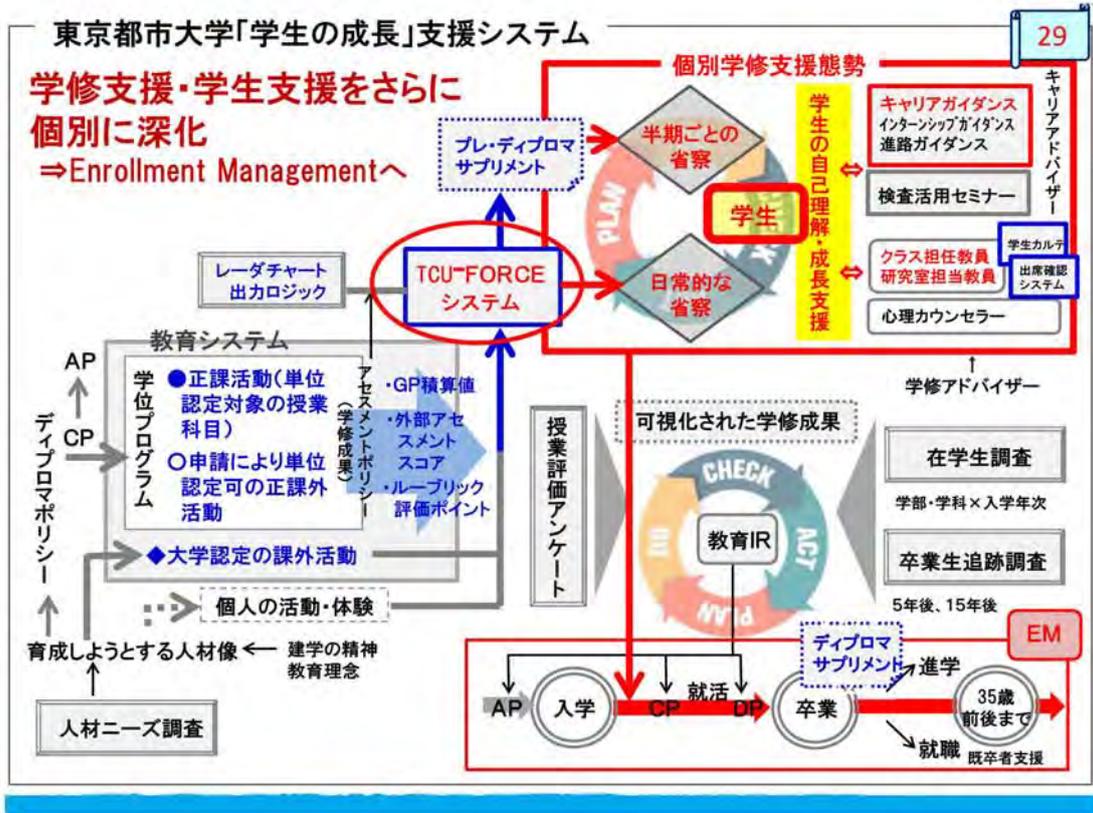


課題の解決に向けて

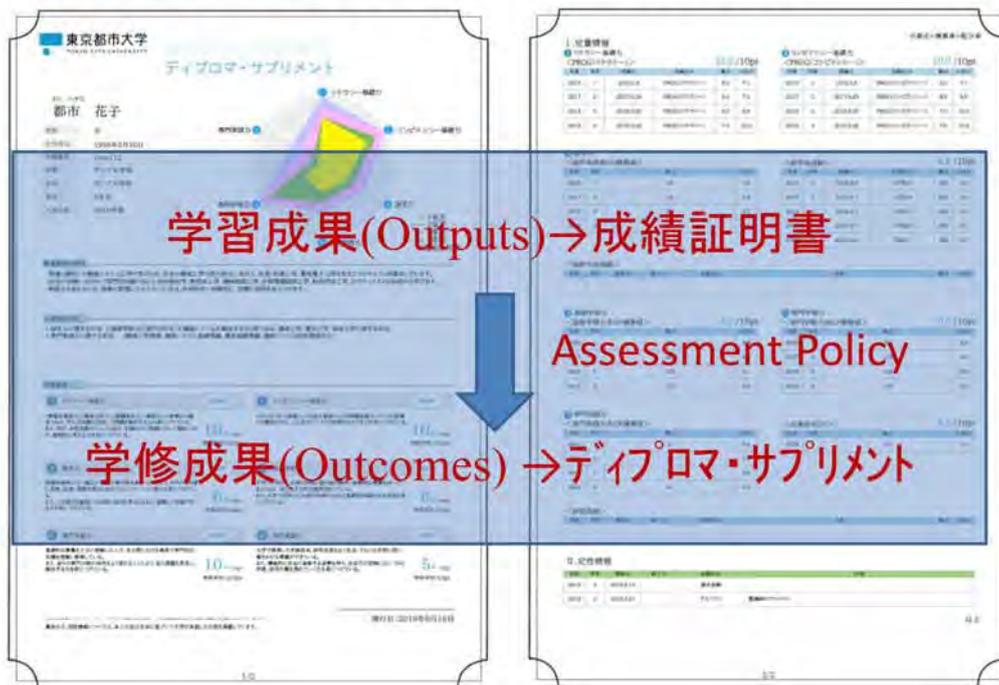
この3年間で展開したこと

1. TCU-FORCEとプレ・ディプロマ・サブリメントを開発する
2. 1年生の入学時から半年毎にキャリアガイダンスを実施する
3. 教職員による学生サポートを充実する
4. 正課教育、正課外教育の両面で学生がより成長できる機会を提供する
→ 例) SD PBL学修ログとの連結





卒業時に発行するディプロマ・サプリメント



TCU-FORCEシステムとは

学生が正課や正課外などの活動で培った経験を登録していくことで、学生の持つ様々な力を可視化し、教職員の支援を受けながら「自己理解と成長」を促す学修支援システム

「FORCE」 = **FOR** Career **E**nrollment



TCU-FORCEの開発で可能になったこと

1年生からその都度、学生自身の情報を確認し、成長度合いを認識できる

- ①レーダーチャートによる**定量**情報の表示
- ②承認されたアピールポイントの**定性**情報の表示
- ③キャリアガイダンスで目標設定⇒振り返り⇒再目標設定
 <PDCAを習慣化>
- ④キャリアポートフォリオ機能で日々の活動を記録

※④キャリアポートフォリオ機能のみ学生本人だけが閲覧可能、①～③の機能は教職員も閲覧可能

TCU-FORCEシステム概要一覧表

33

区分	レーダーチャート表示	ユニット	学籍成果の評価				学籍支援 機能 コメント ※入力 力され たもの に対し て	
			教員への 承認依頼	評価項目	入力方法	レーダーチャート ポイント換算		
グラフ内訳	①リテラシー基礎力	PROG(リテラシー)	×	PROG(リテラシー)結果	CSV一括投入	PROG結果に基づきポイント換算	○	
	②コンピテンシー基礎力	PROG(コンピテンシー)	×	PROG(コンピテンシー)結果	CSV一括投入	PROG結果に基づきポイント換算	○	
	③語学力	語学系試験	学生手入力 のみ承認依 頼あり	×	語学系授業GP積算値	基幹システム連携	語学系授業GP積算値に基づきポイント換算	○
				○	G-TELP	学生手入力		○
				○	TOEIC	学生手入力		○
				○	TOEIC-IP	CSV一括投入		○
				○	TOEFL (BT)	学生手入力	語学系試験得点に基づきポイント換算	○
				○	TOEFL (CBT)	学生手入力		○
				○	TOEFL (PBT)	学生手入力		○
				○	英検	学生手入力		○
				○	IELTS	学生手入力		○
				④国際交流体験	国際交流体験	○	○	海外での国際交流体験(3か月以上)
	○	海外での国際交流体験(3か月未満)	学生手入力				5点	○
	○	国内での国際交流体験(6か月以上)					5点	○
	⑤基礎学力	基礎学力系GP積算値	×	基礎学力授業GP積算値	基幹システム連携	基礎学力授業GP積算値に基づきポイント換算	○	
⑥専門学力	専門学力系GP積算値	×	専門学力授業GP積算値	基幹システム連携	専門学力授業GP積算値に基づきポイント換算	○		
⑦専門実践力	卒業研究	×	卒業研究	基幹システム連携	卒業研究の評価に基づきポイント換算	○		
	専門実践力系GP積算値	×	専門実践力授業GP積算値	基幹システム連携	専門実践力授業GP積算値に基づきポイント換算	○		
⑧研究活動	研究活動	○	研究活動(学会発表・実習など)	学生手入力	5点	○		
アビール 項目	—	アビール項目	○	アビール項目(ボランティア・課外活動・アルバイトなど)	学生手入力	—	○	
ガイダンス	—	目標・省察	×		学生手入力	—	○	
活動記録 (日々)	—	日々の活動記録 (非公開)	×		学生手入力	—	×	

キャリアポートフォリオ機能 学生が日々の活動記録を登録

34

キャリア形成

※キャリア形成において、専攻の卒業が第一のこと、期間限定のこと、あるいは特定の資格取得が第一のことなどを登録していただければ、キャリアポートフォリオがあなたのキャリアを支援する最適なツールとなります。

2017年度

プロフィールの修正やコメントの書き込み、登録ももちろん可能です。また、登録した活動記録は、いつでも閲覧することができます。

登録した活動記録は、いつでも閲覧することができます。

※教職員は閲覧することができないので、必要によって面談時に
学生と一緒に画面を見ながら活動記録を共有する

年月	日付	内容	詳細
2017/12/10		授業の振り返り	
2017/09/17		13期のキャリアコースを履修	
2017/02/16		卒業を準備中	

接客業の難しさを痛感

この日のアルバイトで、接客の難しさを痛感しました。私の思い通りではありません。お客様とコミュニケーションがうまくいかず、お客様が怒っていました。私の接客はお客様に満足させることができませんでした。

写真や文書データを記録として残すことが可能

活動記録の登録

試行から実践への展開

平成29年度

一部担当者による試行

平成30年度

特定の学部・学科での試行

— 1年生:693人、2~4年生:145人 —

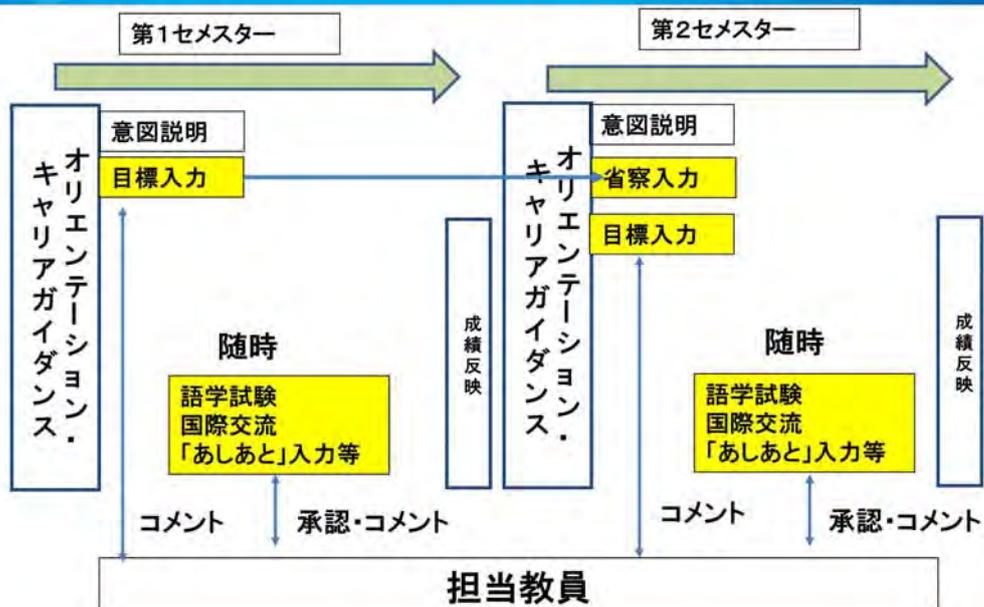
平成31年度

平成30年度卒業生(49名)に
ディプロマ・サブリメントを試験的に発行

平成30年度の学生に加えて、全学の新生での運用



各学部学科での実施方法



学科の担当教員への依頼

学生が自己理解を深め、成長に向けて主体的・自律的に活動することを支援する、身近な存在としての役割

ex.) ・学問・専門の立場からだけでなく、社会で働く先輩として、学生がPDCAをうまく回していくための、気づきやヒントを与えるアドバイザー

・努力や成長を認め、褒め励まし、時に失敗や挫折に共感し、勇気づける、学生から見て頼りになる存在

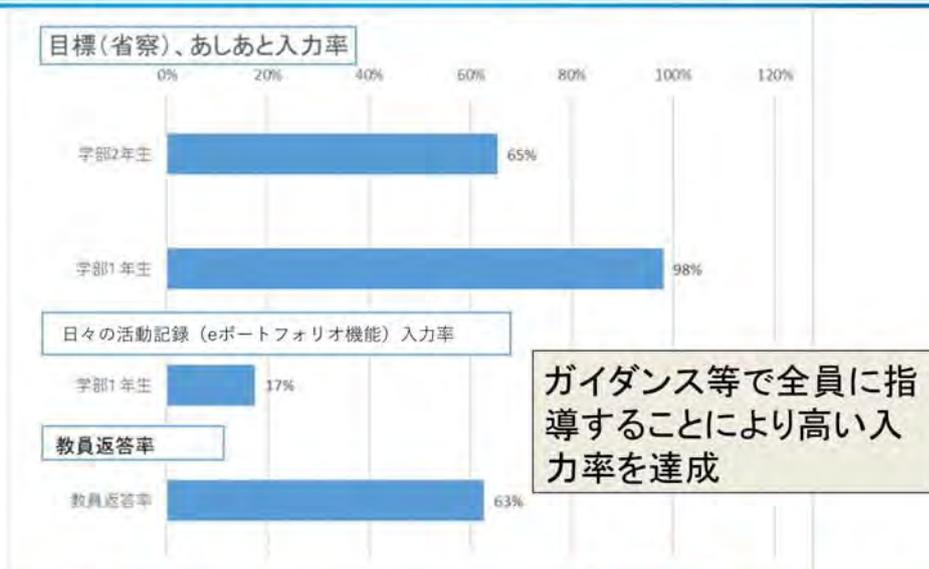
★具体的にお願したいこと

- ① 「TCU-FORCE」での**学生の学修活動の承認やコメント記入**による日常的な応援・アドバイス

※学科として、各学生の承認担当は誰が行うかを決定。担当教員に学生からの承認依頼が来た場合には教員用画面のアイコンとメールでお知らせ

- ② 「TCU-FORCE」などを活用した**個人面談**による学修支援

運用状況 (2019年11月現在利用率)

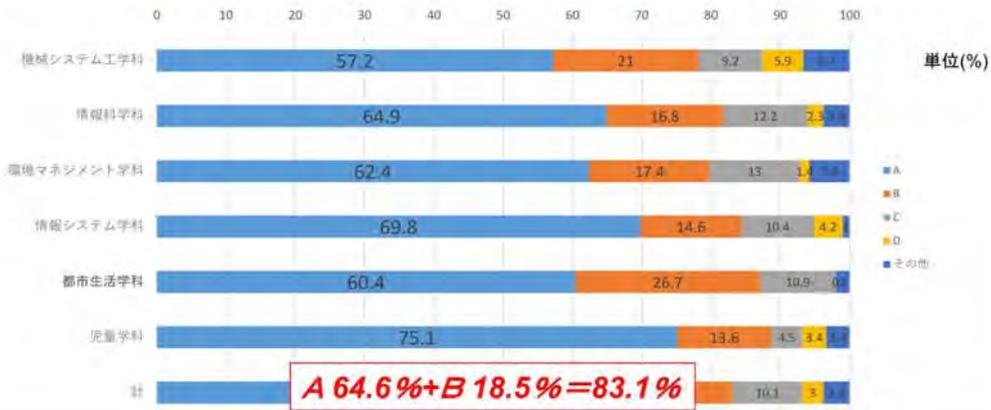


試行学科1年生向けガイダンス 受講学生のアンケート

39

今日のガイダンスを受けて、これからの大学での学びや生活に向けてどんな気持ちになりましたか？

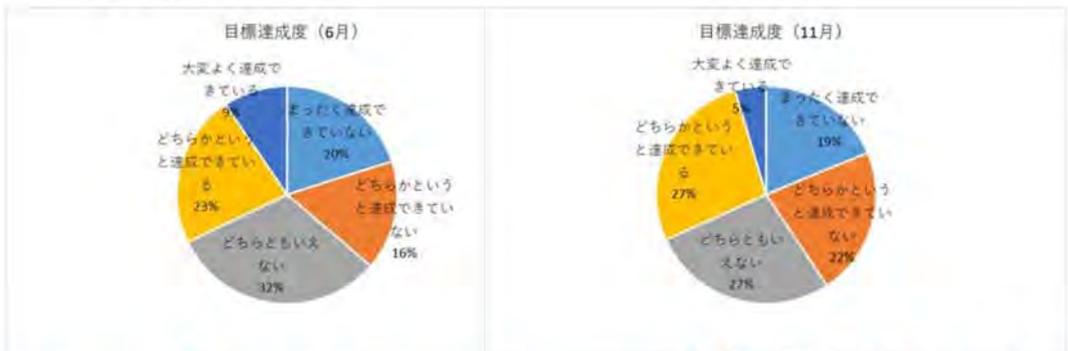
- [選択肢] A: 実は不安が大きかったけど、やる気が高まった。やれる気がしてきた。
 B: もともとやる気が高かったけど、もっとやる気が高まった。
 C: 不安があったが、今日の内容を聞いてさらに不安が高まってしまった。
 D: 不安はなかったが、今日の内容を聞いて不安になってきた。



学生の目標達成度

40

- 都市生活学部1年生の目標達成自己評価
- 前期・後期で大きな変化はないが、「どちらかといえば達成できていない」がやや増えているが、「目標意識の高まり」ともとれる



これからの展開 キャリア支援センターとの連動

41

昨年度の問題への対策として、TCU-FORCEの日々の活用を促進する目的で、学科の担当教員による対応に加えて、キャリア支援センターの資源を有効に活用する。

現在、キャリア支援センターには**キャリアコンサルタント国家資格を保有するスタッフ**が12名在籍しており、今年度、3学科の大学1年生に対して、キャリアカウンセラーによる**低学年からの個別面談**を通じたキャリアデザイン支援を試行実施中。

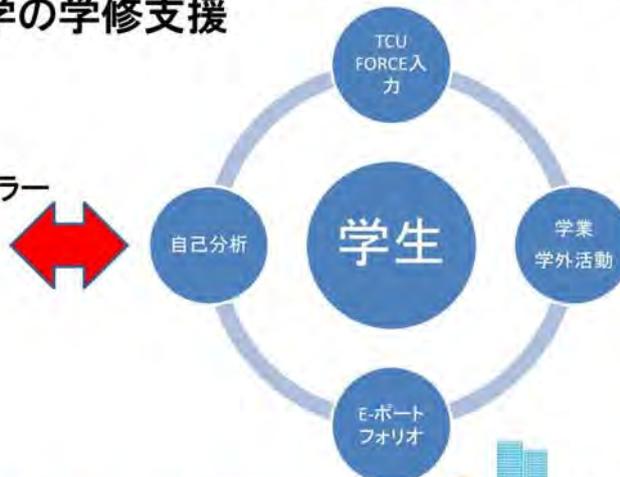


PART2 まとめ

42

- 学生が「自ら主体的に」自分の道を見つけることこそが、東京都市大学の学修支援

- 教職員
- キャリアカウンセラー
- 家族
- 企業
- etc.



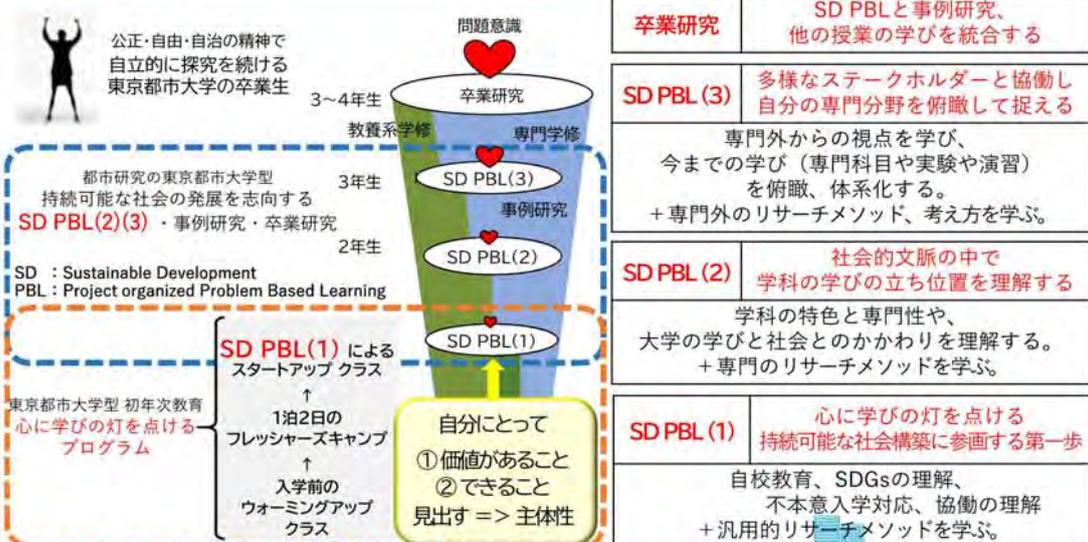
PART3

初年次教育から卒業までの学修をつなぐ段階的な能力育成



初年次教育をスタートに SD PBL (1) ~ (3) を修め 卒業研究へつなぐ

SDGsで、
ボーダーを超える概念を学び
自分の可能性を拓き
社会変革の意欲を芽生えさせる



4年間にわたる継続的PBL教育による 主体的学修と評価

45

- ★ 各年次にマイルストーン的に配置されたPBL科目を同じ評価項目で評価
- ★ 学年進行とともに各項目の評価レベルが高くなるように設定
- ★ 学生は評価内容を確認して次の目標を設定しながら学修
- ★ 最終的に卒業時のレベル(ディプロマポリシーで規定したレベル)に到達



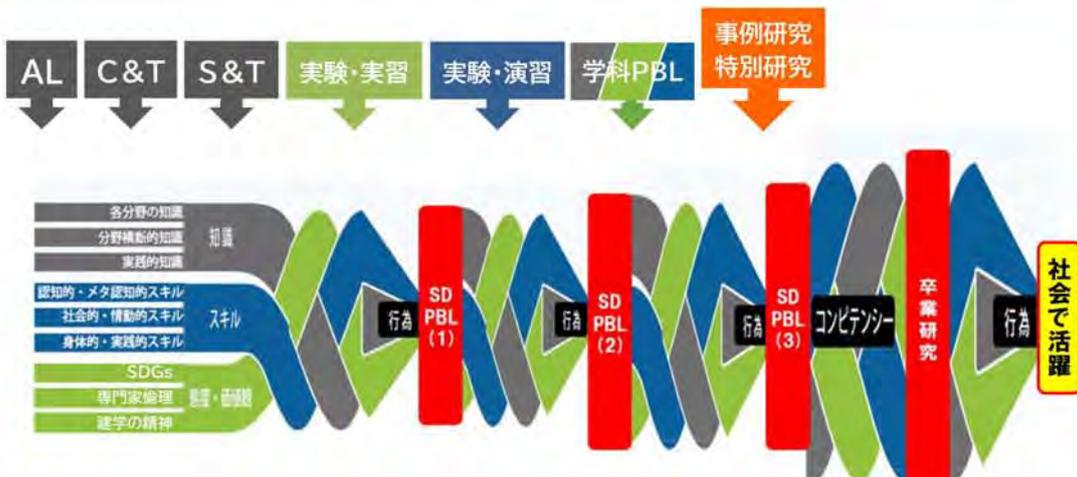
1年 (入学前を含む)	2年	3年	4年
導入教育型 SD PBL (1)	問題認識型 SD PBL (2)	社会連携型 問題解決型 SD PBL (3) + 事例研究	卒研
PBL(1)で活用する 知識科目 PBL(1)で活用する 実技科目 汎用的 リサーチメソッド	PBL(2)で活用する 知識科目 PBL(2)で活用する 実技科目 専門の リサーチメソッド	PBL(3)で活用する 知識科目 事例研・PBLの 実技科目 専門以外の リサーチメソッド	
専門科目群			
基礎専門科目群			
共通科目群			
課外活動			

ディプロマ
ポリシーの
レベル充足
のための
到達レベル
見える化と
継続的学修

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

SD PBLと 各授業、卒業研究 との融合

46



OECD Education 2030 Framework(cf. OECD, 2016, p.2)を加工

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

卒業研究の評価に関する背景と目標

47

全学ディプロマポリシー策定

本学卒業生として備えるべき知識、能力の明確化

本学における「卒業研究」の位置づけ

全学科最終学年の必修で、学部学修の総まとめとして本学を特徴付ける科目

卒業研究の評価手法

ほぼ全学科でルーブリックを用いているが、再整備やガイドライン作成が必要

SD PBLや事例研究等の関連科目との接続

卒業研究関連科目は、全学年に配置し、段階的に能力開発を行う

TCU FORCEによるeポートフォリオの構築と運用

在学中、卒業時の能力可視化システムを実現し、学生が自身の成長に利用

➡ 卒業研究の評価と関連科目との関係を検討

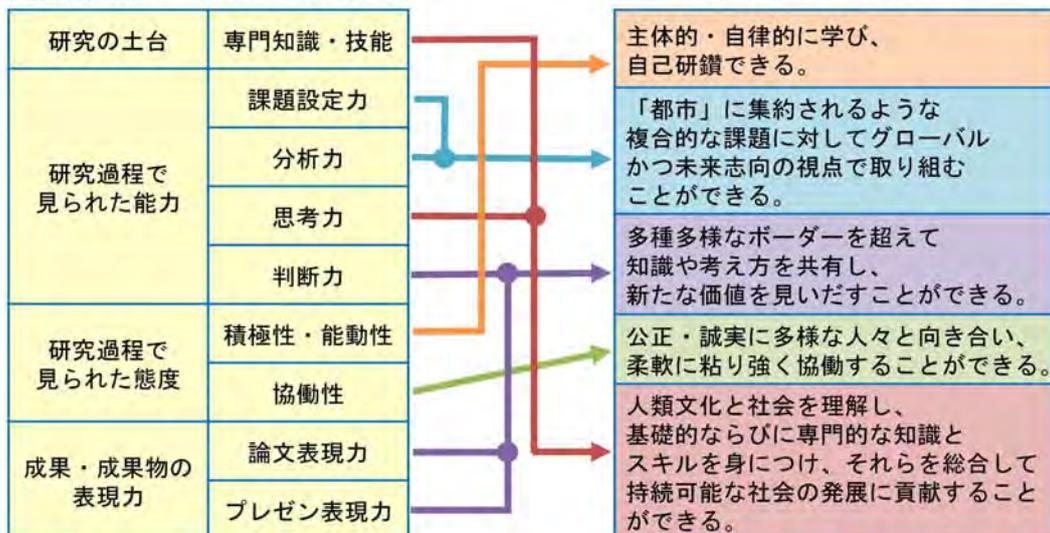


卒業研究用標準ルーブリックと全学ディプロマポリシーの関係性

48

卒業研究用ルーブリック評価項目

全学ディプロマポリシー



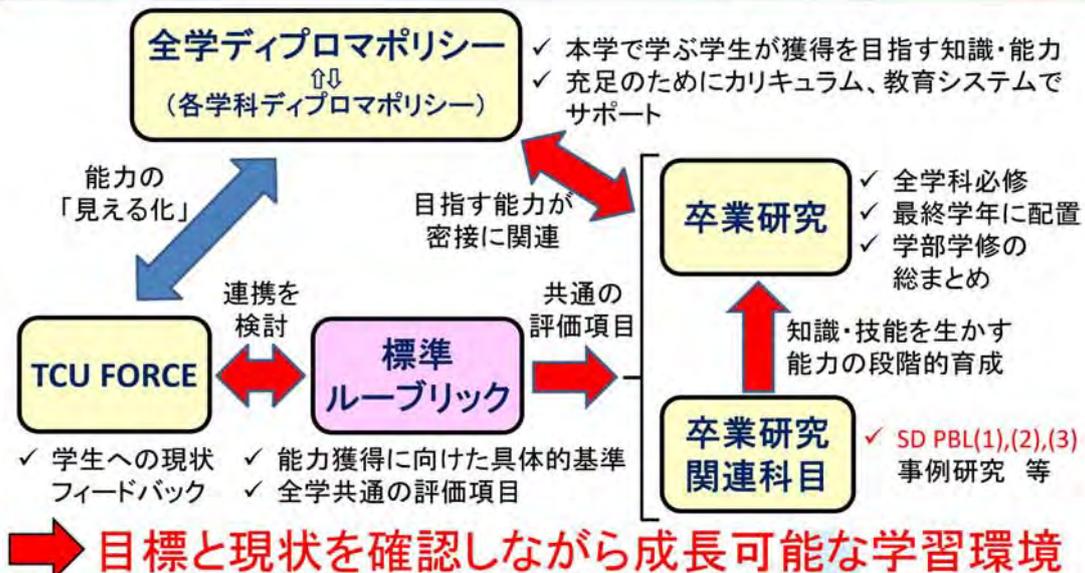
統合的科目の評価と能力の段階的育成

- 内容、指導法、評価手法に関するワークショップの実施
- ルーブリックによる評価基準の策定に着手

項目	学年 科目	1学年		2学年		3学年		4学年
		PBL(1)	既存科目 a	PBL(2)	既存科目 b	PBL(3)	事例研究	卒研
DP に即した 学位認定 の到達目標	PBLと卒研におけるパフォーマンス評価方法の提案と統一基準提示							
	学修目標1		1~30					
	学修目標2	1~10	11~20	21~30				
	学修目標3						1~15	16~30
	学修目標4	1~6		7~13		14~20	21~25	26~30
	⋮	1~3	4~6	7~9	10~12	13~15	16~22	23~30

レベル30が卒業要件認定レベル

能力養成と評価システムの関連



終わりに代えて — 学年制というボーダー —

51

- クラスの学生数, 各科目の履修者数の安定.
- 一様性の高い状態での授業の実施.
- 4年間で卒業して就職という固定観念.
- 安定した授業料収入.

- 単位制の下, 科目ナンバリング, 先修条件でコントロールへ.
- 授業料の従量制へ. 再履修科目の単価を通常履修より高く.
- 成績不良者はCAP更なる厳格化, 成績優良者は優遇.
- 総在籍者数の管理については, 国の施策の調整が不可欠.

**18歳で入学し, 4年間の学習を経て, 就職あるいは進学するという
画一的なキャリア形成からの脱却が不可欠?**

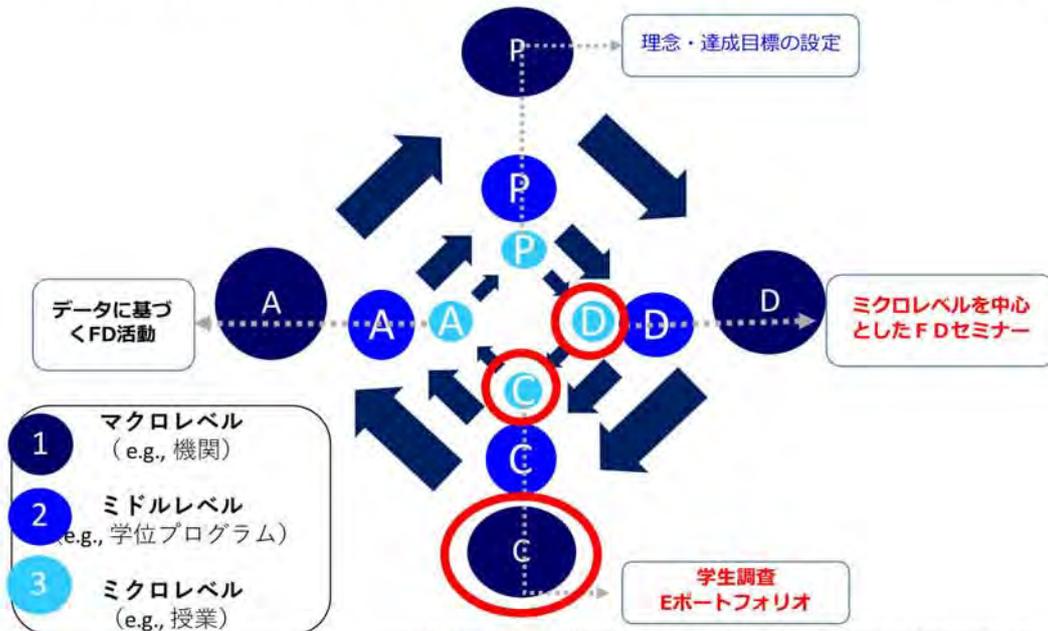


大阪府立大学の AP事業の成果と課題

大阪府立大学 高等教育開発センター
畑野 快

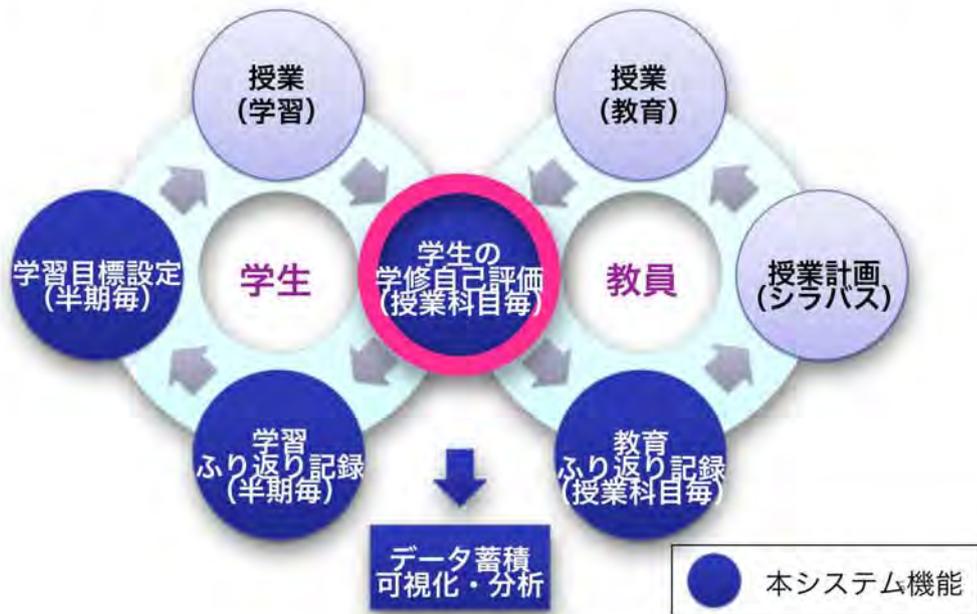
1

内部質保証システムと高等教育開発センターの役割



佐藤浩章（2015）FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ大学教育学会課題研究報告書。
森朋子・紺田広明（2017）関西大学の内部質保証システムにおける教学IRのデザイン参照

授業アンケートからeポートフォリオへ



「授業振り返り」学修自己評価項目

(2017年度改訂)

- 到達目標事前理解度
- 出席率
- 受講態度

学習取り組み姿勢（授業時間内）

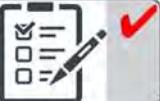
- 授業外学習時間
- 予習割合

学習取り組み姿勢（授業時間外）

- 各回理解度
- 到達目標達成度
- 学修成果満足度

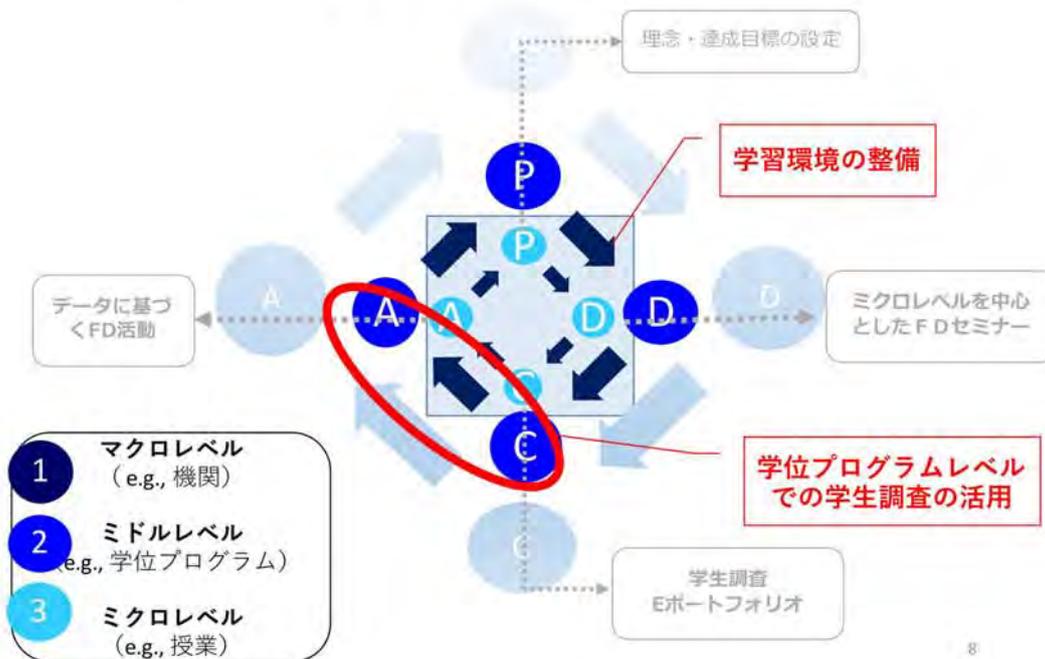
学習の成果

府大のFDの課題

- 
 アクティブ・ラーニングを推進するための学習環境が整っていない
- 
 アクティブ・ラーニングに関する教授学修法の支援が学位プログラムレベルで十分でない
- 
 学生調査を実施してきたものの、学位プログラムレベルで活用されていない
- 
 eポートフォリオの入力率が低い、学びの履歴をみやすくすること

7

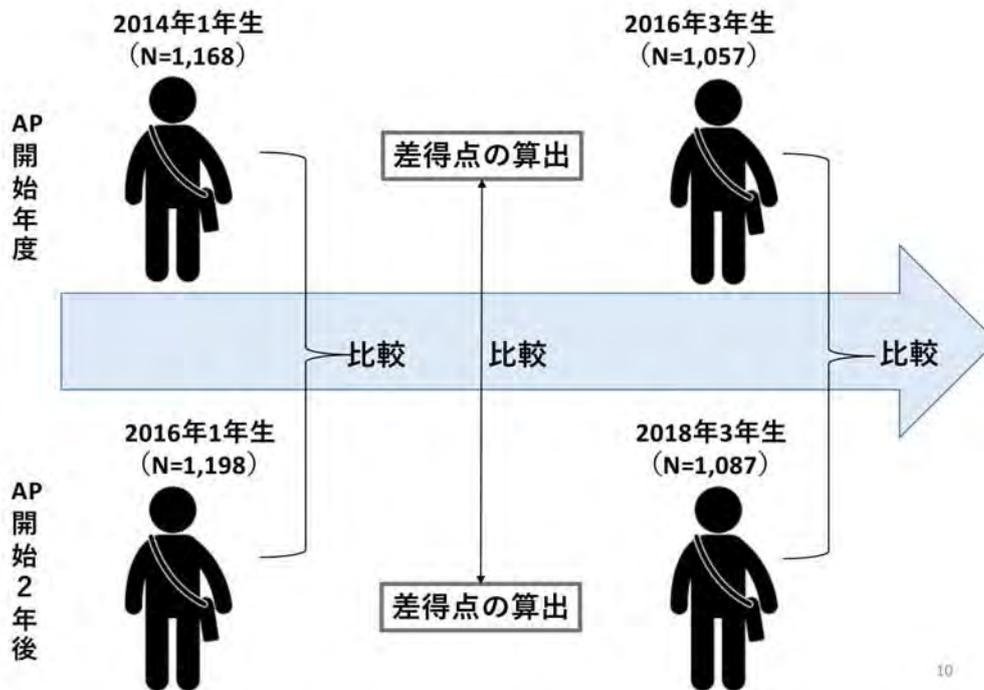
内部質保証システムとAPの取組み



8



学生調査データの比較による効果検証



着目した指標

- **アクティブ・ラーニングの経験**

ex)授業中に学生同士が議論する

AL普及の程度の確認

- **授業外学修時間**

ex)授業に関する予習復習にかけた時間

- **能力の伸び**

ex)専門分野や学科の知識

学修成果(?)の確認

- **教育・学習環境に対する満足感**

ex)教育全体の質

- **eポートフォリオの入力率**

11

AP事業での成果

- **アクティブ・ラーニングは推進されたか？**

- 上級生調査のデータを比較した結果からALの経験の程度、授業外学修時間は増加傾向にある
- 専門教育のALが推進された可能性

- **学修成果が向上したか？**

- 上級生調査の比較から能力の伸びに関する項目、教育に関する満足度は上昇傾向にある
- APが開始して以降、学修成果が向上している可能性

- **eポートフォリオへの入力率は高まったか？**

- 全体的に入力率は向上している
- APの成果

12

AP事業を経ての課題

meaQsシステムの普及
→広報・座談会の推進



教養・共通科目への支援
→大規模授業でのAL支援



eポートフォリオの活用
→教員の入力率向上と振り返りwsの企画



学位プログラムレベルでの
質保証の推進
→**スタートアップ事業**の
展開



13

質保証の実現に向けて：トップダウン・ボトムアップの統合的アプローチ

・トップダウン・アプローチ

- 学域長・学類長を対象とした質保証の重要性を推奨する試み
- スタートアップ支援**：教育プログラムにおける質の保証・向上に資する部局での取組みの立ち上げに対する経費支援

・ボトムアップ・アプローチ

- 高等教育開発センターを中心としたデータのフィードバックと教育支援に関する議論
- 学類フィードバックとセミナーの開催

学位プログラムレベルでの質保証に関しては管理者、それ以外の教員含め、根気強い説明が必要不可欠

14

スタートアップ支援制度の取組みの例

